「静けさに満ちた日常の中で」

ガンと診断されて

「お帰り、どうだった？」
田所善夫が病院から戻ると、妻の朋子が結果を聞いてきた。少し間を置いて
「ああ、やっぱりガンだってよ。胃以外にも転移しているらしい」と、善夫はあえて淡々と答えた。
善夫はここの所、胃痛などがあり食欲も無くなり、胃カメラを撮ってもらいに自宅近くの私立病院に行ったのだった。

善夫は６７歳、文京区で個人タクシーをしている。
個人タクシーの資格を取るには自動車の運転を職業にした期間１０年以上、申請する営業区域で２年以上、タクシーの運転を職業にしていなければならない。
善夫は５０歳でサラリーマン生活に区切りをつけた。毎日同じ時間に起き、同じ電車で会社に行き、与えられた仕事をつつがなくこなしていく日常に虚しさを感じるようになったからだ。
４時間以上残業することも当たり前だった。残業の日は帰宅が１２時近くになってしまうので、軽い夜食をとって風呂に入って寝るだけのために帰って来るようだった。当然気分転換もできず、翌朝目がさめても重い気分しか味わえなかった。
家族との会話も途切れ、善夫は心が壊れる前にこういう生活から抜け出したかった。
新聞の求人欄に載っていた「タクシー運転手募集中」に目が行ったのもこういう事情があったからだ。
少なくともタクシーの乗務中は自分の思い通りに仕事ができる。誰かに命令されるわけではなく、人目も気にせず、自分の思ったところへ行きお客さんを探せばいい。
駅のターミナルに行ってもいいし、街中を流してもいい。タクシー業務に慣れてくれば、遠距離を乗ってくれたお客さんに名刺を渡し、次回から予約を入れてもらうような営業もしてみようかなと妄想にふけることもあった。
１回の勤務時間は長いが、勤務明けの休みの時間も長いという所も自分に合っていると思った。
こうしてドライバー生活が始まった。１２年間大手のタクシー会社に勤務しながら、５年前に個人タクシーの資格を取って独立もできた。
子ども達も独立し生活費にも余裕が出てきた。これからは月に何日かは休みを取って妻の朋子と温泉めぐりもいいかな、なんて考えていた矢先だった。

血相を変えて朋子が善夫を問い詰めてきた。善夫があまりにも淡々と「ガンだったよ」などと言うからだ。
「それで、あなたお医者さんはなんて言っていたの」
「ああ、ガンはすでにリンパ節に転移しているということで手術をしても全部摘出するのは難しいと言っていたよ。いわゆるステージⅣというやつだ。治療するなら抗がん剤くらいしかないそうだ。でも抗がん剤で完治することはないというんだ。先生が、『抗がん剤をやると嘔吐や抜け毛、体重減、味覚障害など日常生活にはかなり支障をきたしてきますがどうしましょうか？』と聞いてきたので、少し考えさせてほしいと答えたんだよ」
「でも、あなた、治療をすれば良くなるんじゃありませんか・・・？」朋子も目の前の善夫を元気付けようと必死だった。
だんだん善夫は現実を理解し始めたのか、また朋子に胸のうちを全部打ち明けた安堵感からか、急に怒りがわいてきた。
「目の前が真っ暗だ。せっかく何十年も苦労してやっとゆとりが出てきたというのに。俺はこれから人生を謳歌しようと考えていた矢先だった。神も仏もないのか、この世は。俺が一体誰に迷惑をかけたというんだ。何でこんな仕打ちを受けなきゃいけないんだ」
善夫は怒りで震えていた。こうした言葉を朋子に投げつけるしか自分の気持ちを制御することができなかった。
震える身体を意識しながら時間が経過していくにつれ気持ちが少しずつ落ちついてきた。
「でも誰が悪いのではない。運が悪いと諦めるしかないのか・・」とそんな考えもよぎってきた。でも死ぬのは正直怖い。今まで自分が死ぬなんて考えたこともなかった。取りとめのない暗い思考が頭の中を流れていった。

善夫は夜になり布団に入ろうとしたが、暗闇が怖かった。こんなことは生まれて初めての経験だった。「人間は横になるのも怖いときがあるのか」心の中で呟いた。
仕方なく布団の上に胡坐をかいて気持ちを落ちつかせようとするが、よけいに頭は冴えて恐怖が増してきた。
「輪廻転生はあるのか・・？　天国って本当にあるのか・・？　死ぬと天国の入口で自分の愛した人が待っているっていうけど本当か・・？　親父やお袋が笑顔で迎えてくれるのか・・？　そこで両親と昔のような生活ができるのか・・？　そんなことはあるわけがないか。そんなことがあるのなら、今のこの生活は一体何なのだ・・？　死ぬと俺の意識はどうなってしまうのか・・？」
いろいろな感情が次から次へと沸いてくる。感情が昂ぶってくると大声を出してしまいそうになった。
「今夜が勝負だ。今夜寝ることができたら俺は絶対に大丈夫だ」ふと、善夫はそう思えた。
以前医者から貰っておいた睡眠導入剤を１錠服薬することにした。今までは、なるべく飲まないようにして仕舞っておいたものだ。

今は何でも悪い方に考えてしまう。気持ちを穏やかにしよう。こんなときこそ、瞑想をやってみよう、とふと思いついた。
お腹を膨らませながら息をゆっくり吸う。吸い終えたら今度は倍の時間をかけてゆっくり息を吐いていく。これを繰り返していくその間は、何も考えないように呼吸に集中しようとした。これを何回か繰り返していくうちに気持ちが落ちついてきた。薬も効いてきたのかもしれなかった。
横になろう、善夫はそう思った。布団に身体を預けると意識が薄れてきた。

善夫は、違う病院で再検査をしてもらうことにした。セカンドオピニオンだ。そのためには、いつもの病院に行って担当医から自分のカルテを借り、紹介状を書いてもらわなければいけなかった。
「医者には嫌な顔をされるだろうな？」そう思ったが、自分の命がかかっていると思うとそんなことはどうでもいいことのように思えた。

## セカンドオピニオン

１週間後、善夫は有名な私立慶早大学病院にいた。目の前には、眼鏡を掛けた６０歳代の医師が真剣にカルテや胃カメラの写真を見ながら「ウーン」と小さい呟きをもらした。
白髪で頬の角ばった医師は、この症状からどのようにしていったら良いのかを考えているように思えた。
「田所さん、ガンには大別して２通りあります。１つはガンが他の臓器に浸潤し、離れた部位に転移しているものです。この場合には原発巣を切除しても治癒は難しいものです。２つ目は放っておくと大きくなるけど浸潤や転移を起こさず、命取りになりにくいものです・・・。残念ながら田所さんのガンはかなり進行して転移もしています」
「先生、するともう僕の病気は治らないんですか」
「はっきり申しますが治療は難しいと思います。手術をすすめる医者は多いですが僕は反対です。高度進行ガンに対して無理な手術を行っても延命効果は期待できないからです。多大な苦痛と後遺症で田所さんが苦しむだけですから」
医師は声のトーンを落としながら答えた。
「先生、どうしたらいいんですか」善夫は半べそになりながら尋ねた。
「田所さん、ガンを放置するとガンがどんどん大きくなってすぐに死んでしまうのではないかと思っている人は多いんです。ガンは放置しても何も変わらないこともありますし、少しずつしか大きくならないケースがほとんどなのです。中には小さくなっていく、消えてしまうというケースすらあります。慌てて手術や抗がん剤治療を受けると、かえって寿命を縮めてしまうことが多いのです。田所さんのガンはもう体中に転移していますので手術で取りきることはできません。抗がん剤は猛毒でたった１回の投与で命を落としてしま

う人さえいます」
「先生、あきらめろというのですか」
「田所さん、冷静に聞いてください。抗がん剤はガン細胞ばかりではなく、正常な細胞も破壊していきます。その結果、患者さんの骨髄を全身的に破壊していきます。骨髄が破壊されるとウイルスなどの外敵をやっつける白血球の数も激減してしまいます。白血球が減少すると抵抗力を失い細菌やウイルス、カビなどにどんどん感染してしまいます。突然４０度を超える高熱が出て、抗生物質も全く効かないまま重篤な肺炎に陥り、あっという間に亡くなってしまうケースは日常的にあることなんです」
「では、なぜ多くのみなさんは抗がん剤治療を行うのですか」善夫は力なく聞いた。
「悲しい話なのですが、多くの医師が標準治療といいまして手術、放射線治療、抗がん剤をやるのを当たり前と思っているか、または病院からの指示によるためです。現在の診療報酬制度では、短期間で病床を次々に回転させていかないと、病院の収益が上がらない仕組みになっています。仮に抗がん剤治療を入院で行ったとすれば、長期間１人の患者にベッドを占有されてしまいます。そこで最近では外来療法センターなどの専門の施設を設け、その施設で入院ではなく通院で抗がん剤治療をするようになっています。医師は、病院側からの指示に従わざるを得ないという事情もあるのです」
「そんな馬鹿な話しがあるのですか」
「これが医療の現実です。日本で使われている抗がん剤は欧米では認可されていません。抗がん剤は１割の患者さんにしか効かないことを専門家も認めています。田所さん、今、体調はどうですか？」
善夫は我にかえって自分の身体の異変に気づいた。ここの所、体重が減少してきていた。鳩尾ﾐｿﾞｵﾁや背中がきりきり痛むことが多くなった。食事をしなくてもお腹はいつも張っている感じがする。
「あまり良くありません」
「田所さん、先ほども言いましたがガンは急には大きくなったり悪さをするわけではありません。痛みを取り不快な症状を緩和していく治療をしながら様子をみていきませんか。その方が生活それ自体は普通に送ることができますよ」
「先生、ほんとうに何もしなくて大丈夫なんでしょうか」
「田所さん、ガンは初発巣からガンの転移巣の成長を抑える物質が出ているケースが多いのです。初発巣を手術で切除してしまうと、転移巣の増殖を押さえ込む物質の分泌も失われ、転移巣が暴走することがよくあります。手術の後に、猛烈な勢いでガンが再発するのもその所為です」
「先生、痛みや吐き気、膨満感は取れますか」
「はい、痛みはモルヒネで取れますし、吐き気に効く薬もあります。これからいろいろな症状が出てくると思いますが、そのために緩和治療があるのです。こんなことを言う私は病院にとって厄介者だと思われているんです。でも、苦しんでいるのは患者さんですから

ね」
「先生、どうするか少し考えてみます。今日はありがとうございました。緩和治療というのはどこでも受けられるのですか」
「そうですね、最初にかかっていた病院では無理そうですね。田所さん、ホスピスという施設をご存知ですか。参考のためというか後学のためと思って一度見学することをお勧めします」

## セカンドオピニオン　２

善夫は不思議な気持ちを携えて、慶早病院を後にした。ここの所の体調の悪さから自分でも病気はかなり進んでいるように思えた。あの医師の言うとおり手術や抗がん剤治療をやったら、そのまま病院から出てこられない気がした。
「参考のため医師から照会されたホスピスを見てこよう」そんな気になってきた。
自宅に着くと、妻の朋子からの質問攻めが待っていた。

「どうして、抗がん剤治療で治るかもしれないじゃない」
「う～ん、主治医が面白そうな人で、いろいろな話をしてくれた。その先生がこんなことを言っていたよ。転移はあってもガンによる症状が少なければすぐに死ぬことはありません。抗がん剤治療や手術が逆に死期を早めることがあります」と言うのだ。
「そんなこと言ったって、やってみなけりゃ分からないじゃないの」
善夫は今日、先生と話しをしてきたメモを見ながら話を続けた。
「先生が仰るには、本物のガンは幹細胞が生まれてすぐ、人間には見つけられない０．１ミリの大きさの時くらいから血液に乗って全身に転移を始めていると言うんだ。検査して発見される早期ガンと呼ばれているのは、既にしこりが１センチ前後に育ったガンの晩年だという。それは幹細胞が生まれて１０年～３０年も経っているもので、すでにガン細胞は１０億個にも増えていて全身にガンの転移が潜んでいる状態らしい」
「それで・・・・」朋子は絶句して力なく聞いた。
「さっき言ったように先生が俺に聞いてきたんだ。『抗がん剤をやりますか？』と。でも先生が言うには、抗がん剤が効くというのはガンが小さくなるという意味で、ガンが消滅することではないと言うんだ。今、抗がん剤が使われ続けているのは、ガン細胞は正常細胞と違うからガン細胞だけを殺せるはずだ、という思い込みがあるからとも言っていた。でも実際は、ガン細胞は正常細胞が少しだけ変化したもので、抗がん剤はガン細胞と正常細胞を見分けられないらしい。抗がん剤は、細胞分裂の激しい細胞を攻撃するように作られているのだが、実際には正常細胞の方がガン細胞よりも激しく分裂をしているので抗がん剤は正常細胞もどんどん攻撃してくるのだそうだ」
善夫は話を続けた。

「最近では分子標的薬というのもできているとも言っていた。ガン細胞の中にある特定のたんぱく質に抱きついて、その働きを妨げることでガン細胞を殺すという薬らしい。ところが、分子標的薬イレッサというのが発売され、世間に期待されたのだが発売から２年半で５５７人もの死者を出したという。先生が言うには、分子標的薬は何十種類もあるそうだが、残念ながらまだ有効ではない、という感想をもらしていたよ」
「じゃあ、死ぬまで何もするなってこと」朋子は、声を荒げた。
「先生が言うには私の場合、抗がん剤をやったときの余命は１年～２年なのだそうだ。ところが、何も治療をしない場合の余命というのは分からないらしい。というのも、治療をしない時の余命のデータがないからなんだ。案外何もしない方が長生きできるかもしれないと小さな声で言っていたよ」
「何を馬鹿なことを言っているんですか」朋子は半べそになりながら声を絞り出した。
「朋子、人間はいつか必ず死ぬ。ただ誰もその日を知らずに漠然と過ごしているだけだ。ただ俺の場合はたまたまステージⅣのガンになり、余命があと１～２年なのだろうなということが分かったというだけだ。だから俺は残された余命をどう生きるか、真剣に考えていこうと思っている」
「あなたはそれでいいかもしれませんが、残された私たちはどうするんですか」
「朋子、先生が言うには多くの場合助からないと言われてから半年から２年くらい普通に生活できる期間があるというんだ。効果があるかどうか確かめもせず、次々に違う種類の抗がん剤を変えて治療を続け、だるさ、呼吸苦、吐き気、痺れと闘いながら、食事をしても麻痺して味覚がなくなり、体がボロボロになってからホスピスに行く人が多いらしい。もうその時は生きる気力も無くなってしまった人がほとんどなのだそうで、手術や抗がん剤を受けたことを後悔している人も多いという」
朋子は下を向いて泣いている。
「俺は、残された時間を大切にしたい。生の原点に立ち戻ってお前や子供たちと語り合い、濃密な時間を持っていたい。それは死ぬまでの１年足らずの時間かもしれないが、今まで生きてきた何十年もの時間より勝る価値のあるものになると思うんだ」

## 気持ちの整理

善夫はそれから数日部屋に閉じこもって気持ちの整理をしていった。
お腹には定期的に鈍痛が起こるし、体重もここの所少し減少してきていた。医者には痛み止めのモルヒネを処方してもらっていたので、不快な時はモルヒネを飲んで症状を緩和できた。
朋子には強気なことを言ったが、やはり「死」に対する恐怖が繰り返し襲ってくる。不安感の中で、いつの間にか同じ境遇の人たちをネットで探していた。
ネットを見ていると、その中に役者の入川保則さんの手記を見つけた。２０１０年７月に

大腸ガンを発病し、やはり転移をしていたという。入川さんは、２０１１年初め余命６ヶ月と診断され、その時すべての延命治療をしないことに決めたと書いてあった。手記の中には次のように記されていた。
「生まれてきていることを覚えていますか？　覚えていませんよね。死後も同じです。今私は死んでも遺族で内紛が起こるほどの遺産がないのでそれは幸せなことだと思っています。延命治療をしないと決めてから、病院に行っても主治医とはバカ話をして笑っていますよ。知らない人が見たら、友人同士でふざけているように見えるでしょうね。本音では生きたいです。でもお金もないし治ったら生活が困るんです。もちろん心の中では葛藤はあります。それはまだ生きようとする欲があるからでしょう。でも、激痛に襲われ、何も食べられないようになり、呼吸も苦しくなるようなら、生きようという欲もなくなるでしょう。生きていれば厄介ごとも、苦しみも次々とやってきます。生きることは「苦」だとお釈迦様が言っているのに、どうして生きたいという欲が起こるのでしょうか。生前葬をやりました。私が吹き込んだ般若心経を流しながら、みなさんへのメッセージを流しました。あとは、ドンちゃん騒ぎですよ。良い死に様は、良き生き様によってつくられると思います。まずは、臨終をイメージしながら今をどう生きるべきかを考えています」

善夫はこの手記を読んで覚悟ができた。
「そうだ、今をどう生きるかで最期の一瞬を幸にも不幸にもできる。後どれだけ生きられるかは神様だけしか知らないが、少し格好を付けてこんな俺でも世の中の為になったなと自負できる生き方をしていこうじゃないか。人のために良いことをすると書いて「偽善」という。偽善でもいいじゃないか、自己満足でいいじゃないか。残りの時間を何か、人のためになることをやっていこう。そのためにも、抗がん剤などで身体を痛めつけ、貴重な残り時間をつぶすようなことはやめよう」
そう思った途端、気持ちが急に明るくなってきた。

善夫は今やるべきことを紙に書いていった。
朋子の生活費について
少ないけれど残していく財産の分配について
知人への挨拶廻りと生前葬について
自分の趣味で集めたものの処分について
もう一度会いたかったけれど既に亡くなった人たちの墓参り
他にもうないだろうか・・・。
考えていくと思ったよりやることが沢山あることに気づいていく。

具体的にどの順番でどうやって進めていこうか考えていると、長男の正雄が部屋に入ってきた。正雄は３０歳、自分で塾を経営している。今日は休みだったようだ。

「お父さん、お袋から聞いたけど治療しないんだって」
「おお、帰っていたのか。医者が言うにはもう手術はできないそうだし、抗がん剤はやりたくないからな」
正雄が下を向きながら少し間を置いて顔を上げた。決意したように尋ねた。
「お父さんは死ぬの、怖くないの・・・」
「そうだな。正直言うと少し怖い。でも死に対する恐怖は健康人の特権だとも思う。今でも胃に激痛が走ることもあるし、この先手足が痺れたり、息をするのも苦しくなってきたら、早くこの苦痛から免れたいと思うようになるんじゃないかな。少し怖いと思えるのは、今はまだそこまで体調が悪くないからかもしれないな」
「結核だって不治の病と言われたのに治るようになったじゃない。もう少し、何か出来る治療はないのかな」
「うーん。そういう時代が来るかもしれないな。でも考えようによっては、ガンだって元の俺が死んでしまえばガン自身も死ぬわけだよな。そういう意味で、ガンにとって自分が増えていくことは自殺行為なわけだ。ガン自身が増えることによってガン自身も死ぬわけだから。もしかしたらガンは、人口が増えすぎないように、人間が長生きしないための摂理の一現象なのかもしれないと思うようになってきたよ」
「父さん、家族は治療して延命してほしいとみんな思っているよ」
「正雄、そりゃ治るものなら苦しい治療でも何でもするさ。でも、ガンが全身に転移してしまっている現状での治療行為は、私の貴重な残りの人生を台無しにしてしまう可能性が高いと思うんだよ。それに体力の残っている間にやっておきたいこともあるしな・・」
「・・・・・」
「正雄、ホスピスって知ってるかい。ガンなどの末期患者の身体的苦痛を緩和し、残された時間を充実して生きることを可能にして、心静かに死に臨み得るように幅広い介護を目的にした施設のことだ。お父さん、最期はホスピスに世話になりたいと思っている。今度、見学に行くから一緒に来てくれないかな」
しばらく沈黙が流れた。下を向いて、鼻を啜っていた正雄がやっと口を開いた。
「うん、わかったよ」

## ホスピス

善夫はホスピスについていろいろとインターネットで調べてみた。その中には名前の通った大きい病院もある。でも善夫が目を付けたのは多摩にあるホスピスで、投稿者の評判が良かった。
名前は「日の出多摩病院」といった。武蔵五日市駅から車で１０分のところにある。写真を見ると自然の中に建物が溶け込んでおり、近くに秋川が流れていた。この辺は、善夫の

趣味の「鮎釣りで」何度か行ったことがあった。善夫は何となく気持ちが前向きになってきている。さっそく正雄の休みの日を選んで一緒に見学に行くことにした。

文京区から首都高速へ乗り、中央道、圏央道へと走っていく。八王子から圏央道に入ると景色は自然みを帯びてくる。あきる野インターを降りると道は秋川渓谷と並行して走っていく。
今季節は春なので趣味の鮎釣りの解禁まではまだ少し間がある。川を覗くと川原は閑散としていた。水面がキラキラと星のように輝いている。
あきる野インターからホスピスまではすぐだった。ホスピスは自然の中の広い敷地に３階建ての大きな病棟が建っていた。駐車場から下を見ると先ほど通ってきた秋川の清流が見えた。

受付で見学をしたいと申し出ると看護士の女性が出てきて案内をしてくれるという。名札には「鈴木きよ」と書いてあった。４０歳代後半くらいで、めがねをかけているがその奥には大きくて澄んだ瞳が輝いていた。長い髪を後ろで束ねており、第一印象はとても清楚で美しい人だった。
善夫と正雄はスリッパに履き替え、館内をさりげなく見渡してみた。１階は廊下を進むと右側に大きなスペースがあり、患者さんらがリラックスできるような談話室があった。そこで患者の２人が長椅子に座って話しをしていた。
鈴木さんが、善夫の方を見て話しかけてきた。
「田所さん、今２人で話しをしている右側の車椅子の人は進行性肺腺ガンなんです。お医者さんから『両肺に転移があり、手術はできませんと言われたそうです。抗がん剤の効果も期待できないというので、元気なうちにやりたいことをするのがいいと思います』と医師に言われたそうです。でも治療を諦めきれずに名医と言われている名古屋の大学病院の教授を見つけて受診し、手術と抗がん剤治療を受けたのです。抗がん剤治療後は吐き気や食欲減退、だるさに襲われて回復するのに３週間もかかり、やっと回復したと思うと次の抗がん剤治療が始まるといった入院生活だったようで体重は一挙に１０キロも減ったそうです。治療の効果が思わしくなかったので、抗がん剤の種類は何度か変わったそうです。そのうち脊椎骨転移を発祥して歩くことが困難になって、治療をあきらめやっとここにいらしたんですよ」
「そうなんですか・・・」
「ここに来てから抗がん剤の苦しみから解放され、吐き気が取れたようで、食欲も増して体重も増加してきたんですよ」
鈴木看護士は嬉しそうに話しをした。
「でもあんな治療など受けずに、もっと早くここに来たほうが良かったと、いつもお話しされていますよ」

今度は２階の入院病棟を見させてもらった。エレベーターに乗って２階で降りた。
２階は病室が中庭を挟むように四角に並んでいた。個室もあれば４人部屋もあった。中庭には桜の木が胸を張って立っていた。
鈴木さんに招かれるように一つの個室に入ってみた。中には善夫と同年代の男性がテレビを見ていた。
「佐藤さん、見学の方なのですがちょっとお邪魔しても大丈夫ですか」
鈴木さんは微笑みながら尋ねた。
「ああ、いいよ。丁度暇だったんだ」佐藤さんは愛想のいい笑顔で迎えてくれた。
「お休みのところ申し訳ありません」善夫は挨拶した。
「なに、いいってことよ。ところで、そちらさんはどこが悪いんです」
「私は胃ガンなんですよ」善夫は答えた。
「そうですか、お辛いですね。私はね、食道ガンで２年半前に再発しましてね。前の大学病院では私のガンは進みすぎていて手術ができないというんですよ。仕方なく放射線治療に廻されましてね。でもね不思議なのは、私より軽い症状で手術を受けた同室の３人はみんな先に死んでしまいましたよ。手術のできなかった私だけがこうして３年近く生きているんですよ。人の運は分からないものですね」
田所は自分と同じ境遇の人の話しを聞いていると、戦友のような親しみを感じはじめていた。
「そうですか、実は私も病院から手術はできないと言われていましてね。でも、まだ体調はそんなに悪くないので、今のうちに好きなことをやっておこうと決めたんですよ」
「その方がいいですよ。私も賛成だ。そして、ほんとうに体調が悪くなったらここにいらっしゃいよ。ここは、痛みや呼吸苦などの緩和治療に力をいれてくれているし、働いている人の気持ちがいい。特に、鈴木さんは最高だよ」
「佐藤さん、お上手はやめてください」鈴木さんは、頬を少し赤らめた。
黙って話しを聞いていた正雄は、ホスピスの落ちついた雰囲気に気持ちが安らいできた。
親父の言うとおり、動けるうちは好きにさせて、いざとなったらここで安息の日々を送るのもいいんじゃないかなと思えるようになった。

今度は鈴木さんが患者やその家族が食事を作れるキッチン室に案内してくれた。３０畳くらいのスペースに流し台が３台、大きめのコンロも３台、大型の冷蔵庫が２台、据え付けられていた。誰でも好きな時間に好きなものを作って家族や見舞いに来てくれた人たちと食事が出来るテーブルも用意されている。
「ここでは何を作って食べてもいいんですか」善夫は病院にこんな施設があることに驚いて聞いた。
「ここでは患者さん用の食事も当然ですが用意されています。でも、ここのキッチンを使

ってご自分で好きなものを作りお召し上がることもできるんです。患者さんが食べられるのでしたら基本何を召し上がってもいいことになっています」
「そうですか、もし私がここにお世話になることになったら悪友たちが来て酒盛りになってしまいますな」善夫が首をすくめながら言うと
「ああ、それも大丈夫ですよ。ここで、パーティーを開く人もおりますから。元気なうちは好きなことをやっていただいて構いませんのよ」と鈴木さんが言うのを聞いて田所は安堵感でいっぱいになった。
「本当ですか・・」
「はい、ここでは残された時間を大切にできますよ」
そのやり取りを聞いていた正雄も安心したようだった。
「親父、ここいいんじゃない。患者さんの話を聞いていて無理して手術や抗がん剤などやるより、親父の言うとおり残された時間を好きなように大切に生きていく方が素晴らしい生き方だということが分かったよ」
善夫は黙って笑顔で頷いていた。

## 夜回り

毎晩８時頃に佐藤和輝と井上大吾は家の近くのセブンイレブンで会うことが日課になってきた。
二人とも文京区立の中学の３年生だった。
和輝は母の嘉子と二人暮らしだ。いわゆる母子家庭である。大吾は３人兄姉の末っ子で父が町医者を開業している。
「なあ大吾、おまえ勉強楽しいか」
「楽しいわけはないだろう。俺んちは兄貴も姉貴も優等生だからお袋に褒められているけど、俺は上二人と違って出来が悪いから毎日親から小言を言われているんだぞ。和輝んちは親うるさくないんだろう」
「うちは何も言わないけどよ。でも勉強が全然分からなくてつまらねーな。特に数学なんて、まったくわからねーよ。授業中が地獄だぜ。時計の針が１分ずつ動いているのを数えながらチャイムが鳴るのを待っているだけだ。学校なんて辞めちまいてーよ」
「何で親は兄姉を比較したがるんだろうな。俺は医者になんかなりたくねーよ」
「そうだよな、大吾んちの親父は医者だもんな。お前も医者になれって言われてんのか」
「そうだよ、親父の病院は兄貴が継ぐから俺は大学病院に入れって、俺の顔を見るたび同じこと言いやがってウザイぜ、まったく」

和輝の両親は和輝が生まれて間もなく離婚した。
和輝の父一郎は町の有力者である一条家の長男だ。和輝が生まれると祖母の良子が、嫁の

嘉子に育て方から日常生活まですべてに自分の考えを押し付けるようになった。料理や洗濯物の干し方に始まって、ありとあらゆることまで全て自分の考えを押し付け始めたのである。
良子は何事も自分の思ったとおりにならないと気がすまない性格だった。良子は高知の田舎からこの町の名士である一条家に嫁いだ。良子もまた当時の姑にいじめられてきた経緯があるので、一条家の風習を守っていくことが当然と思っている節があった。口出しだけでなく、嘉子に一条方の親戚付き合いも強いてきた。
「うちは本家ですから跡取りの一郎が恥ずかしくないようにしてください。明日、分家の人が来ますから３時には時間を空けるようにしてください」と命じられることもしばしばあった。小さい和輝がいることなどお構いなく、すべては自分の都合と一条家のことが優先されたのである。
嘉子はだんだんこの生活が苦しくなってきた。夫の一郎に「和輝のことも、これからの生活も私たち二人だけで協力してやっていきましょう。あなたの実家から出て、小さなアパートでいいから、部屋を借りて３人だけでやっていきましょうよ」と懇願したが、一郎は「母の言うとおりにしてくれよ」と言うばかりでまともに嘉子と向き合おうとしなかった。産後の肥立ちも思わしくなく、うつ気味だった嘉子は限界を感じ、和輝を抱いて逃げるように実家に戻ったのはその日の夕方だった。

数日後、一条の父母が一郎を伴って嘉子の実家を訪ねてきた。
「こんな恥をかいたのは生まれて初めてですわ。お宅はお子さんにどういう教育をしてきたのですか。これでは分家の人たちに顔向けできないじゃありませんか」と良子は嘉子と嘉子の両親をなじった。
一郎は嘉子に向かって何かを話そうとしても、母良子が身体を乗り出して何も言わせなかった。一郎はそれで諦めたのか下を向いてしまった。嘉子は一郎のふがいなさを見て、こんな人とはこれからの生活を共にできないと見限ったのである。
「私、離婚します」嘉子の口から突然出た言葉だ。
一条の母は顔を真っ赤に染めて「こんな女が産んだ子どもは一条家の跡取りなぞするものですか。今日からあなたと私たちとは赤の他人です」と言い放った。
流石にふだんは大人しい嘉子の母里子も、その言葉を聞いて切れてしまった。
「結構です。和輝は私どもで育てます。養育費は要りません。その代わり、二度と和輝には会わないでください」と思わず応酬してしまったのだ。

一条の家族が帰った後で、母は嘉子に謝った。「嘉子、ごめんね。おかあさん、ついカッとなって、あんなこと言ってしまって・・・」
「いいのよ、お母さん。お母さんが言わなかったら私が言っていたわ。一郎があれほどにマザコンでどうしようもない男だとは思わなかったわ。これですっきりしました。早く一

条家の素性がわかってよかったわ」

それから嘉子と和輝は実家の近くに２ＤＫのアパートを借りて二人だけの生活を始めた。
昼間和輝を母が面倒みてくれたので、嘉子はありがたく働きに出ることができた。
和輝が中学三年生になるまで嘉子は昼も夜もパートをかけもちで働いた。和輝を食べさせることや学費を稼ぐことで気持ちは一杯で、嘉子は和輝の学業の中身まで心配りはできる状態ではなかった。
和輝の成績が良くないことは知っていたが、それでも楽しく学校に行っているものだと信じていたのである。

「おい、君たち、こんなに遅い時間まで何をしているんだい」
ふと声をかけられた和輝と大吾は振返ってみた。見たこともない７０歳位の人がニコニコして立っていた。二人は顔を見合わせ知らん振りをすることにした。
「何か困ったことがあるのかい」変なおじさんは怯まずに声をかけてくる。そして、笑いながら二人の隣に座ったのだ。二人はあっけに取られて何もできずにただ座っているしかなかった。５分も経つと和輝はイライラしてきた。
「何だよ、おじさん。邪魔だよ。俺らは話しがあるんだからあっちに行ってくれよ」
その言葉には反応せずにおじさんは「君たちいくつ、どこの学校かな？」と尋ねてきた。
二人は困って、黙ってコンビニを去ることにした。さすがに、おじさんは追っかけてはこなかった。

## 夜回り　２

次の日も、又次の日もコンビニに行くと例のおじさんが近づいてくる。和輝と大吾は会う場所を変えることにした。少し暗いけれど平岩出張所の隣にある公園にした。二人が通っている中学校のすぐ近くだった。
スマホのゲームの必勝法を二人で面白おかしく話していると、またあのおじさんがやってきたのにはびっくりした。
「君たち、こんな遅くに公園で遊んでいると変な人に脅かされるよ」と言ってきたので、頭に来た大吾がすかさず
「変な人はあんただよ」と語気強く言ってしまった。おじさんはそれでも平然と
「こんなに遅くまで家に帰らないのは、何か困ったことでもあるのかい」と聞いてきた。
今度は和輝が「何もないよ、ほっといてくれよ」と突っ張った。
おじさんはニコニコしながら隣に座った。呆気に取られた大吾がおじさんのシャツに手をかけ退かそうとした。その途端、おじさんはよろけてベンチから転がり落ちて腰を打ってしまった。

「いてててて・・・、イヤー乱暴だな君は。おじさんは、ただ君たちと話がしたいだけなんだけど」
「俺らはあんたとは話しなんかしたくねーよ。あっちにいけよ」と興奮してきた大吾の言葉は強くなってきた。
「そうかい、邪魔したね。またにしようかね」そう言った途端、大吾はおじさんを殴ろうとした。その時、おじさんの背後から男性が飛び出してきて大吾の拳を掴んだ。その男性は大吾の拳を掴みながら興奮させないように笑顔で、大吾の手と自分の手をゆっくり頭上から下げていったのである。
大吾は不思議な感覚に陥っていた。ゆっくりとした動作に昂ぶっていた気持ちが落ちついていくのが分かった。
「暴力をしてはいけないなあ」その男性はやさしく言った。
「なんだ、正雄じゃないか」おじさんは男性を見ながらびっくりして言った。
「お父さん、ここのところ夜になると出かけていくから後をつけてきたんだよ」正雄は言った。
「正雄、良いところに来た。悪いがあそこの自販機でジュースを買ってきてくれよ」
「ああ」と言って正雄は自販機に向かって歩いていった。
この間、黙って事の成り行きを見ていた和輝は呆気に取られてしまった。大吾と顔を見合わせどうしたものか、思案した。
ジュースやコーヒー缶を手にした正雄が戻ってきた。
「君たち、どれがいい？」と言って４本の飲み物を差し出した。
最初二人は遠慮していたが、正雄に促されると和輝は「俺、コーヒーがいいかな」と言って正雄からコーヒーを受取った。すると大吾も「じゃあ、おれはコーラをもらう」と言って正雄から受取った。
しばらく黙って４人は飲料を飲んでいた。二人はもじもじしていた。さっき悪態をついたのが恥ずかしいような、悪いような感覚を内面に感じていたからだ。
変なおじさんは善夫だった。善夫は残りの人生をどう有意義に生きていこうか考えた挙句、体力の続く限り子供たちを対象に夜回りをしようと決め、ここ数週間街中を歩いていてそこで見つけたのが和輝と大吾だった。

善夫は以前、家庭内暴力を取り扱った著書を読んだ。それから思秋期の子供たちの動向について気になるようになっていた。自分の余命が少ないと分かった今、何とか最後の力を振り絞り、世の中から見捨てられそうな子供たちの力になれないだろうか、と考えていたのである。

善夫が読んだ著書の抜粋である。次の話しは実話で精神科医が実際に体験した話しだそうだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

家庭内暴力

「先生、助けてください。うちの息子が暴れて手がつけられないんです。私も殴られています。先生、今すぐ来て下さい。痛い、痛い、やめなさい」
途中で、誰かの手によって電話は切られました。
私は鈴木将太といい、精神科医であり児童相談所の嘱託医も兼ねています。以前からこのご家庭のカウンセリングを担当していました。

石田太郎は、中２から家庭内暴力をするようになりました。初めは物に当たる程度でしたが次第にエスカレートし、大きな家具を壊したり壁に穴を開けたりするようになりました。
ついには母親にも暴力を振るうようになり、母親を奴隷のように使っては金品を要求するようになりました。母親が断ると、「テメー、ふざけんなよ」と言いながら殴る蹴るの暴力を振るいます。
父親が止めに入ると、いっそう逆上して手がつけられない状態になるため手が出せません。こういう状態が１ヶ月も続いているというのです。

私が駆けつけるとお母さんは泣きながら、「警察を呼んだら息子はどこかへ逃げていきました」と言いました。精神科医の私は、お父さんとお母さんに
「おそらく夜までには、本人は帰ってくると思いますが、そのときにはすでに落ちついていると思います。家を壊されるのは、今はやむを得ないと割り切ってください。しかし、お母さんに今後も暴力が続くようなら、太郎君とお母さんとの分離を図りたいと思います」と伝えました。
夜になると、予想通り本人は何事もなかったように帰宅しました。その後は、母親に命令して自分の思い通りにさせることは相変わらずですが、ひどく暴れることはないようでした。

先日の家庭内暴力は昼ごはんがきっかけでした。
「こんなまずいもの食えるか」
と太郎が言ったので、母親もついカッとなって
「そんなにまずいのなら食べなきゃいいでしょう」
とつい言ってしまったということでした。すると
「オマエにそんなこと言える権利があるのか」
といきなり暴れだしたというのです。私は、
「お母さんが大変なことは良く分かりました。でも本人がそれだけ暴れるということは、

どこかで本人も苦しんでいるのだと思います。何か心当たりはありませんか」と聞きました。しばらく沈黙が続き、お母さんがぽつりぽつりと話し始めました。

「太郎は小学５年生までは成績も優秀でクラス委員を務めていました。でも５年生の終わりくらいから友達の間で次第に孤立していきました。太郎はどちらかというと正論しか言わないところがあり、次第に友人から煙たがられたのかもしれません」とお母さんは小さな声で話し始めました。
「太郎は次第にいじめのターゲットとなりました。いじめはどんどんエスカレートしていき、放課後みんなに取り囲まれて小突かれ、お金を要求されるようになりました。太郎は一度先生に訴えたのですが、先生は全員の前で『石田をいじめている者がいるらしいが、自覚のある者は手をあげてくれ』と言ったそうです。当たり前ですが当然誰も手を上げません。その後直接的な暴力はなくなりましたが、徹底した無視が始まりました」
「そうですか、そんなひどいことがあったのですね」私は小さな声で唸りました。
「徹底した無視ほど太郎の自尊心を傷つける手段はありません。それでも太郎は、中学生になれば他の学校の生徒も来るし、新しい友達ができるかもしれないと、かすかな希望を持っていじめに耐えていました。でも、その期待はたちまち砕かれてしまいました。太郎は今まで〇〇小学校でいじめられていた子だ、という噂が広まり他の生徒からも無視されるようになったのです」
「学校の子供たちは集団になると無意識のうちにひどいことをやってしまうんです。相手の立場に立って『いじめはいけない』と考える前に、自分も一緒にいじめないといじめの矛先が自分に向くことを恐れているのです」
「太郎が学校へ行かなくなったのはそれから間もなくです。でも太郎は学校に行けないことをとても気にしていました」と、お母さんは言いました。
「いじめに耐えて耐えて、ついに学校に行けなくなったのに、それでも太郎君は学校に行かなくてはと思っていたのですね。彼は本当は真面目でいい子なのですね」と私は言いました。

## 家庭内暴力　２

「太郎が幼いときから私たちは共働きでした。家庭には夫のおじいさん、おばあさんがいましたので、二人に子どもの面倒を頼み働きに出たのです」
「そうでしたか」
「私は仕事が面白くなり、やがて会社で重要な仕事を任されるようになりました。それにつれ仕事をする時間が長くなっていき、太郎が５年生になる頃には晩御飯の仕度までおばあさんに任せきりになってしまいました。帰宅は夜の８時９時というような日も多くなっていきました」

「それではお子さんと触れ合う時間は少なかったでしょう」
「今は反省していますが、子どもたちが寝るときに『おやすみ』と言うのが唯一の触れ合いでした。太郎には３歳違いの弟がいました。下の子は駄々をこねるので私が帰宅後に少し相手をしてきましたが、太郎は手のかからない子で、もうお兄ちゃんだし何も問題はないだろうと思い込んでいました」
「太郎君はじっと寂しさを我慢していたんですね」
「何てひどいことをしてきたのだろうと、今思い出すと涙が出てきます。実は太郎が６年生のときに、朝、頭痛を訴えていた時期がありました。病院で診てもらっても異常ありませんという判断でしたので『太郎、仮病じゃないの』と私が叱ったことがありました。太郎はもう、いじめに耐えられなくなっていたのに・・・・」
「お父さんは当時、こういうことをご存知だったのですか」
「恥ずかしいのですが、私は仕事にかまけて家のことには無頓着でした」お父さんは、下を向きながら一言こう言いました。

## 家庭内暴力　３

太郎君が家で大暴れをした３日後、私の病院に夫婦で来てもらいました。二人が病院に来るとすぐにお父さんは「先生、あいつをもう病院に叩き込んでください」と言います。
「先生、あいつは昨日も女房を小突いていたんです。そこを帰宅した私が見つけて『いいかげんにしろ』と怒鳴ったんです。それから、太郎とつかみ合いになり何発も殴っってしまいました。すると太郎は自分の部屋に戻ったので服を直していると、あいつは金属バットを持って戻ってきました。『このやろー、許さねーぞ』と叫びながら、私めがけてバットを振り回しましたよ。私は必死に逃げましたが、あいつは家中の家具をバットで壊してしまいました」
「そうですか。お父さん、もうお母さんは精神的に限界にきていますので母子の分離を図りたいと思います。ただしお母さんは１日に１回必ず太郎君に電話を入れてください。そして『あなたが暴力を振るわないと約束するまではお母さんは家には帰らない』と伝えてください。お父さんはなるべく太郎君と顔を合わせないようにして、刺激を与えないようにしてください。強制入院は事態を悪化させるので今は行いません」と二人に話しました。
「でも、どうして太郎君はこんなに暴れるのでしょう。暴れる人というのは、最初から暴力的なわけではなく、それ以前に何かの被害に遭っている人が多いのですが・・・」
とお二人に聞いてみました。

すると、お母さんが昔を思い出すように話し始めました。
「実は主人の父にあたるおじいさんはワンマンな人で、若い頃は何かにつれ、おばあさんや主人に暴力を振るったそうです。おじいさんは太郎が生まれると私の育児に干渉しはじ

めました。『子どもは甘やかしてはだめだ。小さいときに厳しく育てないと大きくなってから我がままな子になる』と私にきつく注意してきました。子どもが泣いて私に甘えようとしても、おじいさんが怖い顔でにらむので仕方なく抱き上げたりせず、そのまま放置してきました。本当に可哀想なことをしてきました」お母さんは涙をこぼしました。
「太郎が小学校に入る頃になると聞き分けがよい子になってよくお手伝いをしてくれるので、おじいさんは太郎を小間使いのように使っていました。下の弟はものを頼むとすぐに『嫌だ！』と言うので、おじいさんはもっぱら太郎をあてにしてしまいました。今思えば、あの子がこの家の一番の犠牲者なんです」

家庭内暴力　4

「おじいさんは６人弟妹の一番上でしたが、おじいさんの母親は病弱でおじいさんが７歳のときに亡くなりました。その後、おじいさんが母親の代わりに下の弟妹たちの面倒を見ていましたが、自分が６年生くらいのときに戦争が始まりおじいさんの父親も戦死してしまったそうです。親はいないし親戚も誰も助けてくれない中で、おじいさんはたった１人で食料をかき集め、何とか弟妹たちを食べさせてきたんだとよく私に話していました。おじいさんは自分が苦労してきたものだから、人が甘えているのが許せないんです。自分はこんなに苦労をしてきたのだから強くなれたんだって、よく言っていましたから」

お母さんの話しが一段落すると私は、お父さんに言いました。
「さっき私はお父さんに太郎君に近づかないで見守ってくださいと言いましたが、このまま太郎君から逃げていては拉致があかないように思えてきました。お父さん、お母さんと力を合わせてこの難局を乗り越えましょう」
「分かりました」お父さんはきっぱり言いました。
お父さんはさっきお母さんが話した「おじいさん像」の話しを聞きながら頷いていました。そして今暴力を振るっている太郎君がこの家の第一の犠牲者なのだということを理解したのです。

その後、お父さんはおじいさんに次のような話しをしました。
「おじいさん、おばあさん、俺は今まで家のことをほったらかしで、太郎たちのことも任せきりで申し訳ありませんでした。俺もおじいさんおばあさんのおかげで、ここまで大きくしてもらったことに感謝しています。しかし太郎も今、思春期で難しい時期に入っていてお医者さんの話では俺たち夫婦が今こそ力を合わせて太郎に向き合うしか、太郎を立ち直させられることはできないと言われています。俺もこれからはできるだけ家にいる時間を増やすつもりなので、おじいさんは当面は太郎に声をかけることは控えて俺たちに任せて見守ってくれませんか」

おじいさんとおばあさんは黙って頷いてくれました。

それからお父さんは、休みの日になると太郎君兄弟を連れてドライブや魚釣りに出かけるようになりました。
お母さんは、家を出てアパートを借り、そこから毎日太郎君に電話を入れました。太郎君は最初、母親が家を出たことにものすごく怒り
「てめー、覚えていろよ。今度顔を見たら、ぶっ殺してやる」などと言っていましたが、１か月２か月経つうちに電話をしてもあまり怒らなくなり、普通に会話ができるようになりました。
家で暴れることもありましたが、次第にそれも少なくなり４カ月目でお母さん家に戻ることになりました。
家に帰るとお母さんは太郎君に「太郎、今までごめんね。でもわかって頂戴。お母さんにもできることとできないことがあるの。できないことはできないのよ。それから今まで、お父さんとお母さんは太郎のことあまりかまってあげられなくてごめんなさいね。でも太郎、忘れないでね。あなたは私たちにとっては宝物なのよ」と伝えました。
太郎君は嬉しそうな顔をして「うん、分かっているよ」と一言だけいいました。
それから約１年経過してほぼ家庭内暴力は収まり、家で普通に会話ができるようになりました。

お父さんとおじいさんも昔のわだかまりを捨てて、努めて話しをするようになり、今では１週間に一度全員で夕食を共にするようになりました。
　お母さんは言いました。
　「１年前の、あのボロボロの傷だらけの家は、きっとあの子の心の中と一緒だったのだと思います。あの子だけじゃない、家族みんなの心だったのかもしれません」と。

---

## 子どもの心の成長

　さらに、この本には「子どもの心がどのように成長していくのか」ということについても触れられていました。

　子どもの心はどのように成長していくかというと、依存と自立を繰り返しながら成長していきます。
　依存とは言葉を変えると「甘えること」です。
　自立とは言葉を変えると「反抗すること」といえます。
　赤ちゃんは、親に完全に依存した状態で生まれてきます。親は、赤ちゃんに最大限の愛

情を注ぎます。そうして赤ちゃんは安心を得ます。

　そこで十分な安心をもらうと、そのうちに子どもの心にもう一つの気持ちが芽生えます。それは「不自由」です。
　十分な安心感を得た子どもは、次第に縛られていると感じ自分で何でもやりたくなります。
　これが意欲です。意欲が出てくる源は安心感です。意欲が出た子どもは自立に向かいます。何でも「自分でやる」と言いだします。
　そこで子どもはしばらく自由を満喫します。

　ところが自立した子どもの心には、やがてもう一つの気持ちが生まれてきます。それは不安です。そこで子どもは安心を求めて「お母さーん」と依存の状態に戻ってくるのです。
　お母さんがそこで充分に甘えさせてあげると、子どもはまた十分な安心感をもらいます。
　そうするとまた不自由になって「自分でやる」と言いだして自立に向かうのです。
　ここで大切なことは、この依存と自立の行ったり来たりが、あくまで子どものペースでなければならないということです。

　また忙しいときに限って子どもは「お母さーん」と甘えてきます。
　「あんた、もう６年生でしょ、いいかげんにしなさい」
というように、お母さんは子どもを突き放してしまうことがあります。すると子どもは、「愛されていないんだ」と勘違いします。
　また子どもが「自分でやる」というと「あんた、まだ小学生なのにできるはずがないでしょう」と否定してしまうことがあります。
　これが続くと、子どもの安心感も自立心も育たなくなります。
　安心感は甘えから培われます。ですから甘えがあって人は自立していくのです。
　自立につまずく人を見ていると、幼少期に十分な甘えを経験できなかった子どもが多いようです。
　手のかからなかった、聞き分けのよい子だった、駄々をこねたりしなかった、という表現はすべて甘えが不足する状態を表しているのです。

---

## 善夫の決意

善夫はこうした理想の教育からもれて、家庭環境の関係で苦しんでいる子供たちを何とかしたかった。何もできなくても、せめて「彼らの心の苦しみを分かち合いたい」と思った。今の自分なら一切のわだかまりもないのでやり切れる自信があった。残された時間をこう

した子供たちのために使いたいと痛切に思ったのだ。

善夫は呟くように言った。「なあ、君たち学校は面白いかい」
少し打ち解けた和輝は「面白くなんかあるわけないじゃないか。授業中は地獄だぜ。数学なんか全く分からないから、時計の針が１分ごとに進んでいるのを数えて過ごしているんだ」
すると今度は大吾が「うちなんか親父が医者なもんだから、どこでもいいから医学部へ行けと決め付けるし、やってられないぜまったく。兄貴と姉貴は黙って親の言うこと聞いているけど、俺は頭悪いし、医者なんかになりたくないし、勉強なんかやりたくないぜ」
それを聞いた和輝は言った。
「大吾は本当は頭が良いんだよ。ただ、親への反発で勉強しないだけなんだ。だって中一までは学年でトップだったんだから、すごいんだぜ、おじさん。大吾は本当は俺なんかと付き合っていない方がいいんだよ。でも、俺の愚痴も聞いてくれるし・・。いい奴なんだ」
「そうか、大吾君は優秀なんだ。ふーーん。ところで、正雄」と、善夫は息子に問いかけた。
「正雄、どうだい、和輝君に数学を教えてあげては・・」
「そうだね、僕の空いている時間に教えてみようか。どうだい、和輝君」
びっくりした和輝は、
「冗談じゃないよ。誰が勉強なんかやるものか・・」わざと声高に叫んだ。
「和輝君、数学なんて最初から順序だててやっていけば簡単なんだよ。ただ、基本を学んでいないと全然分からなくなってしまうんだ。小学校の算数からやり直してみないかい」と正雄は言った。それを聞いていた大吾は、
「小学校の算数から勉強していけば今やっている数学もわかるようになるの」
「そうだよ。数学は基礎を理解してそこから発展していくものだから、基礎をしっかり理解していけば、その後のことも自然と分かるんだよ。でも、何かの拍子に途中で分からない箇所があって、それを放置したままにしていくと、後のことは全然分からなくなってしまうんだ。学校では、一人のために授業を遅らせるわけにはいかないから自然と落ちこぼれる生徒がでてしまうんだよ」
「本当は俺も中三になって心細くなってきてたんだ。いくら親に反発しても高校受験はもうすぐやってくるし。俺も中一までは結構、勉強分かっていたんだけど、最近すっかり分からなくなってきて不安だったんだよ。おじさんは教師なのか？」
正雄は「いや、教師ではないんだけど。数学とコンピュータが好きで独学で勉強してきたんだよ」すると善夫が
「いやー、自分の息子を褒めるのもなんだけど、正雄はコンピュータや数学の本を何冊も書いているんだよ」
「すげえなー。でも、今更勉強したって受験に間に合うものか。俺は中学卒業したら働く

んだ」和輝はそう言い放つとこの場から立ち去ろうとした。
「大吾、いこうぜ」と言って二人は立ち上がった。
「ちょっと待ってくれよ。それじゃあ、おじさんたちと一度釣りにでも行ってみないかい。自然の中で釣りをするのもいいもんだよ。昼にバーベキューでもしてさ」
善夫は何とか二人に食いついていった。残り少ない自分の人生を社会から置いてきぼりになっている子どもたちに捧げようという意志は強かったのだ。
二人は向き合って唖然とした。どうしたものか、突然の釣りの誘いに困惑していた。和輝は生まれた時から父親のことは知らない。大吾もずっと父親に構ってもらった記憶がない。大人の男性とまともな口を聞くのも初めての経験だった。だから、気持ちの中では今まで味わったことのない新鮮な感情が芽生えていたのは事実だった。
和輝は一度釣りというものをやってみたかった。たまにテレビで釣りの番組を見ていたので釣りに興味はあった。でも、仕掛けや竿のこと、どこで何を釣れるのかさえ全く分からなかった。釣りは最初誰かに教わらなければできないし、釣りを教えてくれる人は自分の前には永遠に現れないと思っていた。
「大吾、どうする」和輝は流行ﾊﾔる自分の気持ちを大吾の決断に委ねた。
「和輝は行きたいのか？　うん、俺は一度やってみたかったんだ。どうせ家に居たって何もすることがないし」
「俺は生まれてすぐ親父がいなくなっちゃたから、釣りをする機会はなかったし・・・」
和輝は小さい声で言った。
「おじさん、いつ行くの？」と大吾は聞いた。行ってみたくなったのだ。
「今度の日曜日はどうかな。おじさんから、君たちの親御さんに話しはするから」
「いいよ。どうせ親に言ったって関心なんかないんだから」大吾は言った。
「それじゃあ、自分の口から親御さんには話しをしておいてね。おじさんたちの連絡先はここに書いてあるから」と善夫は個人タクシーの名刺を渡した。

## 鮎つり

和輝は家に帰ると時計は夜の９時を指していた。和輝が戻るのと同時に母の嘉子もパートから帰ってきた。
母は朝から複数のパートの掛け持ちをして生活費を捻出している。朝から夕方までは小さな出版社で経理事務を手伝い、夕方の６時から８時まではスーパーのレジ打ちをしていた。このくらい働かないとこれからの和輝の学費は出せないと思っていたからだ。
「母ちゃん、今度の日曜日この人が釣りに連れて行ってくれるってさ」と言って和輝はさっきもらった名刺を嘉子に渡した。
「誰なの、この人は」　『個人タクシー　田所　善夫』　と書かれた名刺を見ながら和輝に尋ねた。

「大吾と公園で話しをしていたら、この人が俺たちの話しに割り込んで来て、早く帰りなさいとか言っているに釣りに行こうということになったんだよ」
「バーカ、何言っているのか分からないわよ、今のあなたの説明じゃ」
「つまり、うーーーん、大吾と勉強がつまらないなという話をしていたら、この人の息子さんが俺らに数学を教えてくれるということを言い出したんだよ。だから俺が、今更数学やったって全然分からないからいいよって言ったんだ。それでもしつこく話しかけてきたから、面倒だから帰ろうと思ったら、この人が、じゃあ勉強はいいから釣りに行かないかっていうからさー」
「あなた、本当に中学３年生なの。つまり、大吾君と公園で話しをしていたらこの方が話しかけてきたのね」
「そうだよ」
「それで、何であなた達に数学を教えてくれるという事になったの」
「俺らが勉強なんてしたくねーな、数学なんてまったく分からねーもんな、と言ったら、この人の息子さんが言うのには、数学というのは基礎ができていれば今の勉強も理解できるというんだよ」
「では何、この人の息子さんもいたの？息子さんっていくつ位の人なの？」
「息子さんという人は３０歳くらいかな。俺たちが話しをしていたら後から突然来たんだ。というより、大吾が最初、頭に来てこのおじさんを突き飛ばしたんだよ。そしたら、息子さんという人が突然出てきて大吾のことを止めたんだ」
「あなた達、そんな乱暴なことをしたの」
「してねーよ。ちょっと押しただけだよ」

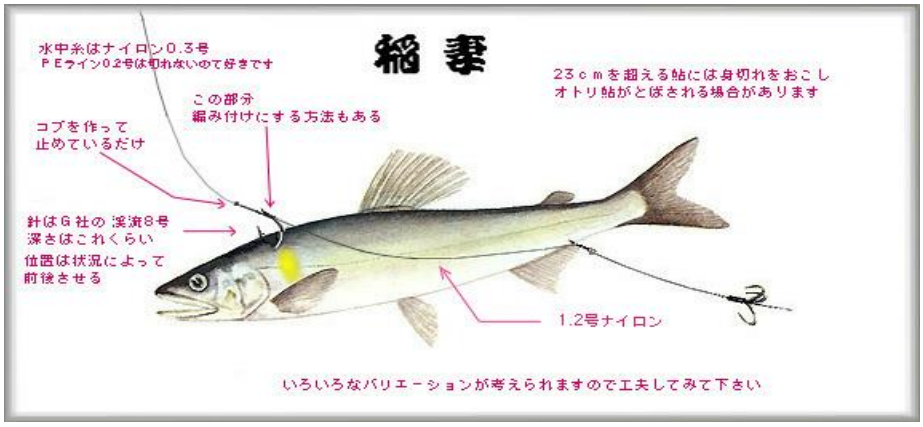
丁度そのとき、電話のベルが鳴った。嘉子が電話に出ると相手は田所と名乗った。
「あー、名刺の方ですか。今、息子とその話をしていたところなんですよ」
「お母さんですか、私は怪しいものではありません。名刺の通り文京区で個人タクシーをやっているんです。実は私、今大病を患っていまして、この世とお別れする前に何か社会の役にたつ事をしたいと思って夜回りをしていたんですよ。そこでお宅の和輝君と話しをしていたら、ひょんなことから釣りに行ってお昼にバーベキューをやろうということになりまして・・。和輝君・大吾君とそれに私の息子と秋川渓谷に鮎釣りに行こうと思っているんです。一応、そんな訳でお母さんにご了解いただきたくでお電話させていただいた次第なんですが」
「でも見ず知らずの方にそんな・・・・」嘉子は口ごもった。
「お母さん、どうかそんな事おっしゃらずに。私の道楽だと思って任せてくれませんか。正直申しますが、私の余命はそんなに長くはなさそうなんです。この世の楽しい思い出を作りたいんですよ、あはははは・・・」
「そんな・・・・。本当ですの」嘉子は絶句しながら言った。

「はい、実は末期ガンです。でも、今は体調はすごくいいんです。でも、これからこういう事をやろうにもできなくなると思うんです。実は、和輝君が勉強が分からなくてつまらないと言っていたんで、バーベキューをしながらうちの息子から数学を習うように説得してみたいんです。息子は正雄といいまして数学だけは良くできるんですよ」
「何だか狸に化かされているようですわ。でも和輝は小さい頃から父親を知らないで生きてきましたから、釣りとかやってみたいのかもしれません。本人はすっかりその気になっていますし」
「ではお任せください。幸い私タクシー運転手ですから、車もありますし運転はプロですから。ちょっと早いんですが日曜日の５時に迎えにきますので、和輝君にそうお伝えください」

## 鮎つり　２

日曜日の朝、ピンポーンというチャイムが鳴った。外に出ると、タクシーに乗った善夫、正雄、大吾がいた。
「おお大吾、お前んち、よく許してくれたなあー」
「いや、おじさんが親に電話を入れてくれたんだよ」
「お前んちもか、俺んちもだよ。母ちゃんが狸に化かされているみたいって言っていたな」
善夫は和輝に「おはよう」と言いながら、嘉子を見つけ挨拶をした。
「初めまして、田所です。先日は突然変な電話をしまして申し訳ありませんでした」
「今日は、ありがとうございます。どうかよろしくお願いいたします。息子が悪さしたらどうかきつく叱ってください。あっ、これ車の中で食べてください。サンドイッチを作りましたの。お口に合うかどうかわかりませんが・・」
「母ちゃん、いいんだよ、そんなことしなくっても。朝飯はコンビニでパン買うから」
和輝は、寝不足でも自分たちのために朝早く起きてサンドイッチを作ってくれた母ちゃんに、ありがとうと言う言葉の変わりにこんな憎まれ口を聞いてしまった。
「ああ、すいませんね。朝早くからご心配をかけてしまって。では遠慮なくいただいていきます。お昼の食材は用意してありますからご心配なく」善夫は和輝の言葉を無視して、嘉子にお礼を言った。
「あのー、失礼ですけどお幾らくらいかかるんでしょうか。今日の費用は」
「何言っているんです、おかあさん。今日は私の道楽ですから気にしないでください。では、もしかしたら帰りは夜になってしまうかもしれませんが、気をつけて行ってきますので心配しないでください」
車を走らせて善夫がバックミラーを見ると、小さくなった嘉子がまだ頭を下げているのが見えた。

「おい、君たち釣りは始めてかい」善夫が後ろをミラーで見ながら話しかけた。
「俺、前に釣堀で鯉を釣ったことがある」と大吾が言う。
「俺は初めてだ。前にテレビで船に乗って鯵を釣っているのを見た。一本の糸に３匹も掛かっていて面白そうだった」と和輝が言う。
「今日は鮎釣りといって、餌をつけて釣るのとは違うんだよ」善夫がレクチャーを始める。
「じゃあ、どうやって釣るんだよ」大吾が突っ込む。
「鮎というのは知ってるかい」
「名前くらいは」と和輝。
「鮎は石についている珪藻というコケを餌にしているんだ。鮎はいいコケがついている石を自分のものだといって、縄張りを創っているんだ。だから、自分の縄張りに他の鮎が入ってくると、そいつを撃退すべく体当たりをして縄張りから追い出そうとする習性があるんだよ。だから、尻尾に針をつけたおとり鮎をわざと縄張りの中に泳がせてやると、そこにいる野鮎が侵入者のおとり鮎に体当たりをしてくるんだ。その時に、おとり鮎の尻尾に付けておいた針に絡んで釣れるという仕組みなんだ」
「何かおもしろそうだけど、難しそう」和輝は笑いながら言った。
「竿は９メートルもある長い竿を使うんだ。仕掛けはおじさんがセットしてあげるから大丈夫だよ」
「まったく親父の釣り道楽が役に立つなんて」正雄が笑いながら言う。正雄は普段、釣りはしないが今日は特別だ。




護国寺から首都高速に乗って中央道を経由し、八王子から圏央道に入るとすぐに「あきる野」というインターがあり善夫はウインカーを出して高速道路から一般道に降りた。
降りて国道を左折するとすぐに大きな橋がある。秋留野橋だ。橋を右折すると砂利道になり、１００メートルも行くと右に「オトリ網元」という看板が見えてきた。
東京なのに、こんなに自然にはぐくまれた所があるのかと和輝は思った。川の周りは木々に囲まれ自然が一杯だ。

## 鮎つり　３

普段過ごしている町にはビルが乱立している。どこに行っても人、人と人が溢れている。
多くの人が携帯やスマホに目を落とし、自分の殻に閉じこもっているように見える。
人がたくさんいるのに一人ひとりの心は繋がっておらず、孤独に苛まれているように思える。これが善夫たち住んでいる都会という町だ。
便利になったのはいいが、それと同時に人の心はバラバラにされた気がする。LINE などでやり取りをすことが自分以外の人と繋がっていると錯覚しているのではないだろうか。
人生ってそんな薄っぺらなものではない。人は自分の生き方をとことん追求し確固たる決意を持って、今をどう生きて行くかを選択しながら歩んでいくものではないのか。
死を目の当たりにしている善夫にとって、メールや LINE などによるうわべだけの付き合いはどうでもよかった。
顔を付き合わせてとことん生き方を話し合い、励ましあい、時にはけんかをしながら人間関係は深まっていくのではないか。
まして、メールや LINE の返事が遅いといって仲間はずれにされるという子供たちの話を聞くと、現代社会の歪を感じざるを得なかった。
運転しながら善夫はこんなことを考えていた。

善夫はオトリ屋に車を止めると、店にいた老婆に声をかけた。
「川の状況はどうですか？」
「ここの所雨が降らないもんで、渇水気味だな。でも魚はいるし大きいから面白いと思うよ」
「どの辺がいいのかな」
「あそこに見える堰下を攻めてみたらいいんじゃないの」
上流を見ると１００メートル先に堰が見えた。約１メートルの段差があり左端に魚の通れる魚道が作られていた。魚道がないと魚たちはそれ以上上流には行けなくなってしまう。
魚道があっても堰下には魚が集まりやすい。鮎が群れているかもしれないな、と善夫は思った。

こうしたやり取りをした後、善夫は「日釣り券」とオトリ鮎を６匹購入した。４人分で全部で１１，０００円だった。
和輝と大吾は生きた鮎を買っているのを見て興奮していた。
「おじさん、この鮎をオトリにするの」和輝は聞いた。
「そうだよ。この鮎が元気に尻尾を振って泳いでくれないと野鮎は追いかけてきてくれないから、オトリ鮎を選ぶのは慎重にしないとね」善夫は答える。
さっき、善夫からレクチャーされていたから分かっていたが、何も聞いていなかったらまったく不可解なことだった。
車を土手の端に止め支度をすることにした。鮎つりは川に立ち込んでする釣りだそうで、胸まで入るウエーダーという長靴を善夫から各人に渡された。ズボンを脱ぎパンツ一丁になってウエーダーを履くと自然と釣師になった気分になるから不思議だ。

着替えが終わると竿、オトリを入れるオトリ缶、タモ網、釣った鮎を入れる船、バーベキューのセットを各人で分散して持ち、川のポイントを目指して歩いて行く。
土手を滑りそうになるのを堪えながら足を踏ん張り川まで降りる。土手から川原までは５メートル位の段差がある。川原におりればそこは大小の石だらけで歩きづらい。平坦な道を歩くより倍疲れる。目指すポイントまで１００メートルしかないが、とてつもなく遠くに感じられた。

ポイントに着くと、和輝も大吾も汗だくになっていた。普段いかに身体を動かしていないかが分かる。善夫はガンで体調が悪いのだろうと思われるが涼しい顔をして歩いており、川の流れを見ながらポイントを模索しているようだ。目がキラキラしている。
「よし、ここら辺でやろうか。最初は釣り方を教えるから他の人はよく見ていてね」と善夫は言い、竿ケースからさおを１本取り出した。穂先に仕掛けの先端をくくり付け、竿を延ばしていく。竿はどんどん伸びていきこれでもかという位の長さになった。
和輝が「これ何メートルあるの」と聞く。
「これは９メートルさ」と善夫が答える。

用意ができると、「誰からやろうか？」と言う。和輝はいても立ってもいられずに「俺から」と思わず声に出してしまった。大吾は興味半分という感じで「俺は後でいいよ」とだけ言った。
善夫の現場でのレクチャーが始まった。
「まず鮎に仕掛けの鼻カンを通すことから始めるよ」
と言い、水中に半分沈めたタモ網の中にさっき購入してきたオトリ鮎を１匹取り出した。鮎は今にもタモ網から飛び出さんばかりに跳ねている。善夫が難なく鮎を捕まえると鮎の目の下にある鼻らしき窪みを指し、ここが鼻だからねと言いながら１センチ足らずの金属でできた鼻カンという丸い輪っかを鼻に通した。鼻カンを鮎の鼻に通すと牛の鼻についている鼻輪のようになる。鮎はもう逃げられない。
「次は針をお尻に打つよ」と言って針が４本ついたイカリ針を鮎の尻尾あたりに固定した。
「野鮎が体当たりしてきたとき、この４本イカリ針に掛かるんだよ」と言う。
「最初はポイントに鮎が入るまでおじさんがやってみるね」と善夫が言い、鮎を手から離した。鮎は元気良く川の中ほどまで泳いでいく。
９メートルの仕掛けの中央に「目印」という赤や緑の毛糸が５本結んである。目印を見ているとその動きで鮎が今どこら辺にいるのか、どういう泳ぎをしているのかが分かる。
鮎が川の中央の波立っている所に落ち着くと善夫は和輝に竿を渡した。和輝はワクワクしながら竿を受取った。９メートルもあるので竿は重いかと思ったが意外に軽いのにはびっくりした。
「意外と軽いだろう。その竿は２４０グラムしかないからね。３００グラムを超える竿は重くて持っていられないよ」と善夫は言う。そういうものなのかと和輝は思うが、鮎の動きから目を離さなかった。
目印は上下に動いているが、あまり目立った動きはなかった。とその瞬間、目印が下流に向かってビューっと飛んだ。すると和輝の持っていた竿の穂先が大きくしなった。
オトリ鮎とそれに掛かった野鮎二匹は下流に向かってすごい力で流れていく。
あんな小さな鮎二匹なのに和輝は体ごと下流に持っていかれそうになる。和輝はパニックになりどうしたらよいか分からなくなった。
竿は伸びきり和輝は本当に鮎に引っ張られて下流に流されそうになった。
「おじさん、どうすればいいの」和輝は叫んだ。
「それ以上鮎が流されないように流れの緩いところに鮎を誘導して」と善夫が叫ぶ。和輝は竿を操って二匹の鮎を川の流心から岸の緩やかなところに鮎を誘導した。流れが緩やかな所に鮎が落ち着くと、「和輝君、そのままでいてね」と善夫は言い９メートル先の鮎のところまで行ってタモ網に二匹の鮎を納めた。その途端、竿は元の軽さに戻った。
ニコニコしながら善夫が和輝の所まで二匹の鮎を入れたタモ網を持って戻って来ると「ほら、下に掛かっているのが野鮎だよ。オトリ鮎と色が違うだろう。野鮎の首の所に黄色のマークがあるだろう。これは追星といって、縄張り意識の強い鮎ほど黄色がくっきりと鮮

やかなんだよ。やったね！和輝君。普通こんなに簡単には釣れないんだけどね」善夫も少し興奮気味に鮎を見せてくれた。
タモ網の中のオトリ鮎とそイカリ針がかかった野鮎の二匹を見ると善夫の言った通りオトリ鮎は銀色をしているが、野鮎は全体に黄色ぽっく、えらの辺りに追星という黄色のマークが入っていた。釣った野鮎からは甘いスイカのような匂いがした。

## 鮎つり　４

レクチャーが終わったら、各人が竿を出すことにした。善夫はみんなが釣るのを眺めており、トラブルがあれば駆け寄って仕掛けを直してあげたり、釣れたら鮎をタモ網に入れるサポートをしていた。
川の中を２０メートル間隔で並んで和輝、大吾、正雄の三人が並んでいた。みんな真剣に目印の動きを追いかけている様は遠くから眺めている善夫には風景画のようだった。
突然「ピーヒョロヒョロヒョロ」という鳶ﾄﾝﾋﾞの鳴き声が静寂の中でこだました。
「ザァーーザァーー」という川の流れ、目の前には緑色の木々を抱いた山が静かに自分たちを眺めているようだ。
自然の中に自分が溶け込んでいく感覚、自分以外には誰もいない自分だけの世界に没頭している。精神が浄化しているようだ。これも鮎釣りにはまる要因の一つでもある。

青い空、草の匂い、山の景色、和輝の気分は爽快だった。そう簡単には鮎は釣れない。目印をぼんやり眺めていると、和輝は母の嘉子のことを考えていた。生まれてすぐに離婚して、嘉子は女で一つで自分を育ててくれた。パートを掛け持ちしながら、朝から夜遅くまで働き通しだ。
だから、普段嘉子は和輝を構う余裕はなかった。和輝は寂しかった。もっと一緒に母と過ごしたかった。近所の友達を見ると、親子で買い物に行ったり休日に遊びに行ったりしている姿を和輝はよく見かけた。羨ましかった。
だから、仕事から帰って来た嘉子を見ると和輝は安堵感でほっとして「なんでえ、もう帰って来たのかよ」などとわざと悪態をついた。でもそれは、和輝にとっては母への甘えだったのだ。
今日も、朝早く起きて朝用のサンドイッチを作ってくれた。多分嘉子はほとんど寝ていないはずだ。和輝は母が心配で、「そんなもん、作ってくれなくてもいいんだよ」という口調で悪態をついたが、それは母の体が心配だったからだ。今日も嘉子はその後に仕事に行っているはずだ。
それなのに俺は、勉強が分からないといっては現実から逃げてきた。嘉子は忙しくて和輝の勉強のことまでは意識が回らないようだ。学校でみんなと仲良く過ごして、どこでもいいから高校へ行ってくれればいいと思っている。

でも、和輝は勉強がまったく分からなくなってきていた。学校は地獄だった。特に数学は今までの流れが分かっていないと、その先は絶対に理解できない。前に習った公式を使っていくので、それを理解していないとまったくちんぷんかんぷんになってしまうからだ。
和輝だってこのままでいいとは思っていない。和輝は和輝なりに不安だったのだ。今度、正雄さんが一から教えてくれるという。「勉強はきらいだからいいよ」と啖呵をきったが内心ではうれしかった。
母の望んでいるいるように高校くらいは行きたかったから。
川の流れの中に立って、水流の圧力を感じながら次から次へと頭に浮かぶことを咀嚼していった。
不思議と和輝の心は幼子のように素直になっていった。
自然の静寂の中にぽつんと一人置かれると心が浄化されていくようだ。あの狭いアパートの部屋や母嘉子のことが懐かしく思えてくるのだ。数時間前に別れたばかりなのに、なぜかそれが遠い昔のように感じられた。
目印がぼやけてきた。和輝の頬には涙がこぼれていた。不思議な感覚だった。時計を見ると１０時だった。確か嘉子の会社では１０時にお茶を出すと聞いたことがあった。和輝は竿を川原に置いて陸に上がり、携帯で嘉子に電話をかけた。
「あっ、母ちゃん、俺。うん、楽しいよ。母ちゃん・・・・いつもありがとう。別に変な子じゃないよ。何だかわからないけど急に母ちゃんの声が聞きたくなって・・・。うん、楽しんでくる・・。じゃあ」

善夫は、何気なく和輝の様子を見ていた。急に川から上がって電話を始めたので近くに行ってみた。そうしたら、和輝は母に電話をしているのが分かった。川の流れの音と並行して聞こえてくる会話の断点が聞こえてきた。話の内容に「かあちゃん、ありがとう」という言葉を確認できた時、善夫は二人を釣りに連れてきて良かったとしみじみ思った。
「俺はあと何回鮎つりに来られるのかな」と、ふと善夫の脳裏をよぎった。お陰さまでガンはあちこちに転移をしているが痛みはない。末期ガンは放置すれば痛みは出ない、という医者の言葉を思い出す。手術、抗がん剤など一切の治療を拒み、残された時間を病院ではなく一般社会の中でふつうに過ごそうと決意して良かったとつくづく思った。
痛みは無いが、食欲は自然と減ってきており体重も並行して減少してきている。
人生を振返ってみると、確かに自分には華々しいことは何もなかった。でも、家族のため地道に働き、子供たちも一人前に成長してくれた。「ああ、俺の人生も満更でもなかったな」と思えるのだった。
死を意識すると残された時間をどう過ごそうか、自分に問われる。善夫は和輝と大吾に自分の最期を託してみたかった。

鮎つり　５

その時、正雄の竿がしなったのが見えた。正雄はやはり素人なのでドタバタしている。善夫が正雄の所に行き、「俺に貸してごらん」と言って正雄から竿を受取ると、「みんな見てごらん」と大きな声で和輝や大吾に声をかけた。二人は２０メートル以上間隔を空けて竿を出しているので結構善夫から離れた場所にいる。
善夫は竿を自由に操り、二匹の鮎を自分のほうへ寄せると竿を天に向かって突き上げた。するとオトリ鮎と掛かった野鮎の二匹の鮎は空中を飛んできた。そして飛んできた鮎を左手に構えたタモ網で見事キャッチした。
「本当はこうやって鮎を取り込むんだよ」と善夫は自慢げに言った。
和輝と大吾は「かっけーいいなー。おじさん、どうやると鮎を抜けるんだー」と叫ぶ。「竿を真上に突き上げるんだよ。無理にやると竿を折るから十分鮎を引き付けてからだよ」と大声で答えた。
「おう！」と和輝と大吾は大声で答え、又自分の釣りに没頭はじめた。
すると今度は大吾の竿がしなったのが見えた。善夫は、あわてて大吾の元へ走っていった。大吾は今日始めて鮎が掛かったので、竿の操作が未熟だった。鮎は川の流れに沿って下流に流されていく。このままだと、竿が伸されて折れてしまうかもしれない。
「おじさん、重いよ、どうしたらいいのーー」と大吾は叫ぶ。
「いいかい、まず流れの緩やかな所へ鮎を寄せよう」と善夫は言って、大吾の竿の一部を持って流れの流心から川のへチに二匹の鮎を誘導した。そして「大吾君、そのまま竿を持っていてね」と声をかけて、自分が鮎の所まで移動してタモ網で鮎をすくって納めた。
「おじさん、ありがとう。鮎ってこんなに引くんだ。びっくりしたよ」と嬉しそうにはしゃいだ。
「こんなに小さい鮎だけど、人間の体が持っていかれるくらいすごい引きだろう。だから鮎釣りは面白いんだよ」と善夫が言うと大吾もニコニコ笑っていた。
「何で俺には釣れないんだーー」と和輝が叫んだ。善夫は和輝の所に行って、「仕掛けを点検してみようか」と言い、和輝の竿を受け取りオトリ鮎を自分の所まで引き寄せた。
「ほら、和輝君見てごらん。針が鮎の尻尾から外れているよ」と善夫は言い、掛け針を鮎の尻尾に打ち直した。
「針が外れているということは、もしかしたら野鮎に追われたかもしれないな。何か竿に変化がなかったかい」と和輝に聞くと「そういえば、さっき竿にガツンという衝撃があった」と言う。
「針が外れていなければ鮎がかかったのにな、残念！」と善夫は言って和輝に竿を持たせたままで、竿の一部を持って、良さそうなポイントに鮎を誘導した。
「和輝君、竿先を見てごらん。竿の先端が曲がるか曲がらないか位の微妙な所で竿を維持するんだよ」とレクチャーしていると、竿先がグイーンと曲がった。
「かかった」和輝は叫ぶ。やはり竿は二匹の鮎に竿は伸され、和輝の体は下流に持ってい

かれそうになった。善夫が大吾の竿の一部を持って、流れの緩やかな所に鮎を誘導すると大吾の体も止まった。善夫がタモ網を持って鮎の所まで行って二匹の鮎を取り込んだ。
「やったー。おじさん、ありがとう。でも、さっきおじさんがやった、鮎を飛ばしてタモ網でキャッチするのをやってみたかったな」と和輝は叫んだ。善夫は、笑いながら「そのうちにできるようになるさ」と小さな声で和輝につぶやいた。
これで、全員が鮎をかけたことになって善夫はホッとした。１日やって、釣れないことだってあるのだから上出来だった。

　それぞれが川の好きなポイントに入って楽しんでいる。全員が何とか善夫がいなくても釣りを楽しめるまでになった。川の前に山がそびえており、茶色の山肌と緑色の木の葉が色濃く映えている。
和輝は周りを見渡す。しばらく鮎の当たりが遠のいており、ちょっとした気分転換だ。少しずつ川の上流に移動していったので、隣の大吾までは１００メートルの間隔が開いた。小さくしか見えない大吾が釣れているのか、大吾が何を考えているのかまったくうかがい知れない。
「ホーホケキョ」というウグイスの鳴き声が定期的に聞こえる。川の流れの音は「ザーザー　」と消えることはない。空には白い雲が転々としているが、あとは真っ青だ。目の前には山がそびえ立っている。和輝は大自然の中で、糸についている目印を目で追いかけながら静寂さの中で自分一人がこの世界に存在しているような不思議な感覚を味わっている。気持ちも穏やかにそして謙虚になってきている。あの日常の母との言い合いも、遠い出来事のように感じられ喧騒が懐かしく思えた。
静寂さの中で今までの自分の悪い所が脳裏をよぎっていく。何なんだろう、この感覚は。今朝も、朝３時に起きて嘉子が作ってくれたサンドイッチを持たされたとき「いらねーよ、コンビニで買うからいいよ」とケチをつけた自分に対して心の中で素直に反省していた。

## 勉強開始

正雄による数学の勉強は平日の夜７時から８時半と決まった。正雄が仕事から帰って来る時間と和輝と大吾の空いている時間を考慮してこの時間に決まった。基本的には平日の毎日だ。場所は、正雄の自宅で行うことにした。
先日の鮎釣りのとき正雄は和輝と大吾に何年前くらいから数学が分からなくなってきたのか尋ねておいた。
和輝は「俺は小学校の６年生位から分からなかった」と言っていた。大吾は「俺は最近かな。中２までは親の言うとおり勉強をやらされていたから・・・」という。
正雄は和輝には、小学６年生の算数から、大吾には中学２年生の数学を教えるつもりでいた。数学は、段階を踏んでやっていけば誰でも理解できるものだ。

ただ、二人が違うスタート位置なので同時に勉強を始めると二人の間に優劣の溝ができかねなかった。そこで、和輝が小６の数学が理解できるまで、大吾には中１～中２の数学を復習できるプリントを作って渡すことにした。大吾はそれを自宅で勉強し、できたプリントを毎日正雄に届けるように伝えてあった。
最初大吾は「俺は自宅で一人勉強かよ。つまらねえな・・」と言っていたが、「和輝が大吾と同じレベルになるまでの間だけ、がんばってくれよ」という正雄の言葉に、「分かったよ。でもプリントを届けた時に分からなかった所は教えてくれよ」と笑顔で答えてくれた。

もう９月だ。来年の２月の高校受験まで６ヶ月しかない。それまでに、何とか和輝と大吾には数学だけは一定のレベルまでにしたかった。
最初の日、正雄は和輝が本当に勉強しに来るか心配だったが７時になると「ピンポーン」というチャイムが鳴って、和輝の顔をみるとホッとしたものだった。
「よく来たな。あと半年一緒にがんばろうな」正雄が言うと、和輝は「よろしくお願いいたします」と答えた。初めて使った敬語だった。それだけでも、和輝の本気度が正雄に伝わった。
「今日は小学校６年生で習う面積の出し方について勉強してみよう。和輝君、長方形の面積の出し方は覚えているかい」と正雄が尋ねると
「確か・・・縦かける横だったけ」と答えた。
「そうだよ。では台形の面積は？」
「台形ってどういうのだっけ」
正雄は台形の形を白い紙に鉛筆で書いてあげた。和輝はうーんと唸って黙ってしまった。
正雄は笑いながら「そうか、この辺から分からなくなったんだね」といって、台形の面積の出し方を話していった。ただ、公式を覚えさせるのではなく、どうしてこのような公式が生まれてきたのか図を描いて教えていった。
和輝は、「そうか、分かったよ。だから台形は上辺と底辺を足したものと高さを掛けて二分の一にしたものが面積になるのか」と一人で頷いていた。
マンツーマンで教えてもらえるので和輝は分からないことが出るたびに質問して答えを教えてもらった。一つずつ理解が増していくことがこんなにも楽しいことなんだと和輝は感嘆していた。元々、和輝はできない子ではなく、勉強をするという環境がなかっただけなので、理解し始めると読解力は早かった。あっという間に１時間半が経って８時半になった。
「もう８時半か。勉強していてこんなに早く時間が経つなんて生まれて初めてだ」と笑いながら和輝が言う。
隣の部屋で待機していた善夫は嬉しかった。
「和輝君、どうだった」善夫が言うと「おじさん、俺おじさんに声をかけてもらって良かったよ。それに正雄さんの教え方が上手だから初めて勉強が面白いって思えたよ」と和輝

は答えた。
「じゃあ和輝君、勉強は誰のためにするか知っているかい」
「自分のためだろう。だってどこの親だって勉強していい大学に入ることが自分のためだって言うよ」
「そうだよね。でも自分のためと思うと、見たいテレビがあったり遊びたいと思うと、まあいいかってサボることができるよね。後で後悔したって自分が悪いかったんだからって開き直れるしね」
「えっ、勉強って自分の為にするんじゃないの」
「もちろん自分のためなんだけど、勉強する目的は自分をピカピカに磨いて昨日とは違う自分に変身するためでもあるのじゃないのかなっておじさんは思うんだ。勉強ができたって人から嫌われる人間では何の為に勉強しているか分からないだろう。テクニックだけ覚えていい大学に入れればいいというのは、心の成長を育むことにはならないしね」
「うーん、難しいな」
「勉強って、今までに地球上に存在した人々が経験し発見した知識や智恵を自分が受け継ぎ自分のものとすることだと思うんだ。もし教科書やその他の本がなかったとしたら最初から和輝君が数学でも歴史でも勉強しなくてはいけないだろう。自分で一つ一つ積み重ねていくなんて考えられるかい」
「そうか、勉強って昔の人が学んだことを代々俺らに伝えてもらうことなんだね。もし教科書がなかったら俺って何も勉強できないじゃないか」
「その通りだよ、和輝君。だから和輝君、勉強して自分を磨くことによって君も誰かの役に立つ時が来るんだ。そのために君は今勉強をするのさ」
「自分のためだけでなく、俺が誰かの役に立つために勉強をするのかあ・・・」
「そうなんだ。それが和輝君がこの世に存在する意味でもあるんだよ。今和輝君は一生懸命勉強できる環境に感謝してほしいんだ。誰にも邪魔されずに勉強できることをね。世界には食べることも勉強することも難しい境遇にいる子どもたちがたくさんいる。君が何不自由なく勉強できるように、君のお母さんが毎日一生懸命働いているということも忘れてはいけないよ」
「そうか、俺が何かの役に立つために勉強をするのなら、やっぱり頑張んなくちゃと思える気がする」
「そうだね。そして何かを成し遂げるためには最後までやり通す強い意志が必要なんだ。その意志の力を持ち続けるために勉強という道具を使うんだよ」
「分かりました。俺、おじさんに会えてよかったよ」
和輝のしみじみという言葉に善夫は、「今、私の人生に意味が生じた！」と心の中で頷いていた。

９時に母の嘉子が仕事から帰って来る。

「じゃあ、おじさんが車で和輝君を送ってあげようかな」と言って善夫は鍵を持って車庫に向かった。

死ねない苦しみ

桐谷美子は埼玉県深谷市で県立深谷高校に通っている。現在３年生で今年、東京にある私立の大学を目指している。文京区にある名前の通った大学で東洋アジア大学という。
スポーツに強く、駅伝・水泳を始め日本では一流の選手を輩出している。大学は、以前関東近郊に学部が点在していたが、本部の周りの土地を買い増しして校舎を次々と新築していった。今では文京区の校舎に地方に散在していたすべての学部を集中させることができた。
美子の家族は祖母のカメ７５歳、父一雄４７歳、母和美４４歳の４人暮らしだ。
祖母は父方の母であり今は年金暮らしだ。カメは６０歳まで熊谷の電機メーカーで４０年勤め上げ定年を迎え、その後は最近まで近所の食堂で賄いのアルバイトをしていた。働くことが大好きなのだ。
でも、最近大腿骨を骨折して足の関節の痛みがひどくなり、歩くのも儘ならない状態なので仕方なく仕事をやめたのだ。
父はやはり熊谷にある広告代理店に勤めている。本社は東京にあるがその埼玉支店が熊谷にある。
母は深谷駅から程近いコンビニでパートをしている。勤務時間は昼間の時間帯だけという約束で深夜の勤めはしていない。
ここの所美子は憂鬱な気分になることが多い。祖母が「早くお迎えが来ないかしら」と呟くのをよく聞くからだ。溜息混じりにボソッと小さな声で呟かれるとものすごく気になった。
美子はおばあちゃん子で、とても可愛がられてきた。美子はおばあちゃんが大好きだった。

祖母のカメは半年前、階段から落ちて大腿骨を骨折し、しばらく入院していたが２ヶ月前に退院して自宅に戻ってきた。ただ、自分で思うように歩けなくなってしまった。
美子の家は３階建てで、１階に祖母の部屋と駐車場、２階にリビングとお風呂、３階に美子の部屋と父母の部屋があった。
カメは食事をするときやお風呂に入るときに自力で２階に上がることができなくなっていた。父が帰宅しないとみんなとの食事をすることもお風呂に入ることもできなかった。父の帰りが遅い時は、食事を嫁の和美が部屋に持ってきてくれる。でも一人で食べる食事は味気なく気持ちも落ち込んでいるので食欲が出ない。
お風呂は一雄が帰宅しないと入ることはできない。
カメは元々働き者で、誰かの世話になるのに抵抗がある。世話をされるよりも人の世話を

やく方が好きだった。
親戚から旬のものが送られてくれば、自分は食べなくても近所にお裾分けをして喜んでもらう方が嬉しかった。

嫁の和美は良くできた人で、こんな姿になったカメを今まで以上に大事にしてくれた。それがカメには反対に心の負担になった。動けない自分に、手取り足取り世話をしてくれる和美に申し訳なくて、カメは部屋で泣くこともしばしばだった。

死ねない苦しみ　２

孫の美子はカメのことが心配でよくおばあちゃんの部屋に行き話しをした。
「おばあちゃん、動けなくてしんどいでしょう」
「そうやな、つらいわ」
「大丈夫、おかあさんや私がおばあちゃんの面倒をちゃんと見てあげるから」
「本当にありがたいわ。でも美子、おばあちゃんは人の世話になるのが苦手なんや。どうしても、相手のことを考えてしまうんや。みんなが忙しい時に、トイレに行きたいと言って２階から和美さんやらおまえを呼ぶのが心苦しいんや」
「そんなの平気、気にしないでね」
「本当におまえは優しい子や。おばあちゃん、大好きやで美子のこと」
「私だっておばあちゃんのこと大好きだよ。だから気にしないで用を言いつけてね」
「骨を折って病院に入院していた時、同じ部屋の人が言っていたわ。その人は私と同じくらいの歳の人なんだけどガンになっちゃってな。ご主人が仕事をやめたら海外旅行に行こうと言っていたのに、自分が大病するなんて神も仏もありゃしないってな。そしたら、隣の人が、この人はまだ７０歳近い男の人だけど、私は定年になったら歴史小説を片っ端から読もうと楽しみにしていたのに、この所目がかすんで本どころではなくなったと言っていたわ。若いときとは違って、歳を取ってくると予想外の出来事に悩み、苦しんでしまうことが多くなってくるんじゃ」
美子は何も言えずに黙って聞いていた。
「長生きを望む人たちも、今の体力のまま長生きできると思っている。誰でも長生きは初体験じゃからな。みんな老後を豊かに楽しもうと思っている。でも決していいことばかりじゃない。体が悪くなることもあるということをしっかり認識しないで老いるから、『こんなはずではなかった』と思うのだろうな」
美子は頷いた。
「おばあちゃんが一番辛いのがトイレだよ。昼間はまだいい。でも、夜中にトイレに行きたくなった時は涙が出てくる。どうして、自分の足でスムーズにトイレに行けないのかって。這ってトイレに行って、便器に顔を付けてやっとの思いでトイレに座るまで１０分近

くかかる。でも、やっとここまでできるようになったからまだいいけどな。つい此間まで夜中に一雄を起こすのは本当に申し分けなかったよ」
美子も父が夜中に母をトイレに連れてっていくのを何回か見ていた。力仕事なので、おばあちゃんをトイレに運ぶのは父にしかできなかった。
「美子、昔は働かないで飯ばかり食べている人を「穀潰し」と言って、人から罵られたんだよ。でも、今のばあちゃんはその「穀潰し」になってしもうた。働きたくても、足がゆうことを効かん」
「そんなことはないよ、おばあちゃんは今まで一生懸命に働いてきてお父さんを育てたじゃない。だから今、私もお母さんもこうしていられるんじゃない」
「ばあちゃんはな、みんなの世話をするのが生きがいなんじゃ。少しでも誰かの役にたちたいんじゃ」
と言って、カメは涙をぬぐった。

死ねない苦しみ　3

その晩、美子は母親の和美に昼間の出来事を話した。どうしていいか、分からなくなってしまったからだ。大好きな、おばあちゃんが自殺でも考えるようになったら、などと余計なことまで考えた。
「そう、そんなことがあったの。辛かったわね、美子」
「そうなの、もうどうしていいか分からなくなっちゃった」
「そうね、ここの所やっと少し動けるようになってきたけど、まだまだ不自由そうね」
「おかあさん、リハビリやるともう少し良くなるかな」
「お医者さんもリハビリは大切と言っていたけど、おばあちゃんは痛くて苦しいでしょう。おばあちゃん、もう歳だから自分のペースで治すって言っていたもんね」
「そうか、おばあちゃんがやる気を出せばいいのね。私良いこと思いついたわ。お母さんん、もし私が大学受かったら一人暮らししてもいい」
「ええっ、あなたが一人暮らし。あぶなっかしいわ、簡単にいいわって答えられないわよ。お父さんにも相談しなくてはいけないでしょう」
「私、おばあちゃんと暮らしたいの。アパートを借りて、身の回りの世話をおばあちゃんに頼むの。もちろん、自分一人で何でもできるわよ。でも、おばあちゃんが私の世話をしなければいけなくなると、一生懸命にリハビリやってくれるような気がするの」
「そうね、おばあちゃんも生活にハリがでてくるかもね。そうだ美子、今日おばあちゃんリハビリの日だから病院に行って今話したこと伝えてみたら。帰りは病院のバスで一緒に帰ってきたらいいわ。お母さん、その方が安心だし」

病院は、美子の自宅からバスで１０分くらいのところにある。名前は「深谷本郷クリニッ

ク」といって、内科・整形外科を主に、老人医療や在宅医療もやっている。さらにデイサービスといって、比較的元気な老人たちが集まり、ゲームをしたり、歌を歌ったり、入浴もできる施設も完備している。
５００坪もある敷地に３階建ての緑色の建物が見えてきた。比較的最近建てられたもので緑色の壁が陽に映えている。
玄関に入り目の前の廊下を左に歩いていくと右手がリハビリ室になっている。部屋の中には、様々なリハビリ用の器具が整然と並んでおり、何人かの患者が施設の看護士の補助を受けながらそれぞれリハビリに励ﾊｹﾞんでいる様子が見える。
ふと美子の右隣から、老女と医師の話し声が聞こえてきた。老女は９０歳に近いだろうか、医師は５０歳前後の男性だ。
「先生、朝起きて死んでいたらどれほどええやろう」
「そんなこと言わないでタミさん、生きていたら又いいこともあるでしょうし」
すると老女は男性医師を睨み付けて
「ええことなんか何もないですわ。苦しいばっかりや。辛いことばっかりや。このまま死ねたらどれだけ楽か」
老女の皺だらけの目尻には、じわっと涙がにじんでいる。医師は言葉を失っている。
「先生、私は生まれてこのかた、悪いことはしたことはありませんよ。自分のことは後回しにして、いつも家族や人様のことを思って生きてきました。それが何でこんな辛い目に遭わなくてはいけないのでしょう。脚が痛いし、歩けないし、ひとりでご飯も食べられませんの。これから又元気になるのだったら生きている甲斐もありますけど、先生もう私は弱る一方でしょう。もう苦しいばかりで何も楽しみがありませんわ」
そこに７５歳くらいのお爺さんが来て話しに加わった。お爺さんは腕を組んだまま
「先生、歳はとりたくないもんですな。仕事をやめたら旅行でもして、大好きなビデオを楽しもうと思うてたのに、目がかすんで字がよう見えん。時間がたくさんあっても何もすることはありゃせんわい。暇ほど辛いものはありませんな」

美子は聞こえてくる会話を聞きながら考えていた。
「うちのおばあちゃんも生きているのが辛いと言っていたけれど、体が不自由になると誰もがこのように考えるのかしら。まだ私は若くてよく分からないけれど、健康で何一つ不自由なことがないから長生きしたいと思うんだわ、きっと。ここにいる人たちは身体の痛みや不自由さに１日中苛まれているし、食事すら一人で食べられないみたいだし・・。私たちが当たり前にできることがここにいる人たちには当たり前じゃないのね。だから生きていること自体が辛いことなんだわ・・・・」
遠くから「美子・・」という声がして、はっと我に帰った。おばあちゃんのカメが手招きをしている。
「おばあちゃん。リハビリは終わったの」

「今、一休みしている所だよ。リハビリは辛いよ。脚が痛くてもうこれ以上がんばれないよ」
「おばあちゃん、お願いがあるの。聞いてくれる」
「なんだい、藪から棒に」
「おばあちゃん、私東京の大学に受かったら東京にアパートを借りて生活しようと思っているの。おばあちゃんも一緒に行ってくれないかしら」
「でも、おばあちゃん、こんな脚だしね。美子に迷惑をかけちゃうよ」
「だから、おばあちゃん。あと半年の間、リハビリがんばって歩けるようになってほしいの。それに、もう一つお願いがあるの。おばあちゃんの作ったご飯を食べたいの。そのためにも、なんとか歩けるようにがんばってほしいの。歩けないと買い物にも行けないでしょう」
美子は涙目になっていた。自分でも予想がつかない展開になった。カメはしばらく放心状態のように天井を見上げ身動きすらしなかった。長い沈黙が流れていく。やがて、カメはポツリと話し始めた。
「うれしいな、美子がそう言ってくれると。でも、一雄や和美さんが何と言うかな。アパートを借りるとなるとお金も掛かるしな」
「うん、でもお母さんは賛成してくれたわ。お父さんにはまだ話ししていないけど、応援してくれると思うの」
「もし、みんなが賛成してくれるのならおばあちゃんは嬉しいわ。もし、お金が足りなかったらおばあちゃんの年金を使ってもらってもいいしな。どうせ、使い道の無いお金だから、こんな時に有意義に使えるなら最高だわ」
「だから何とかあと半年で歩けるようになってほしいの。おばあちゃん、リハビリは痛くて大変なのは分かっているけどがんばってほしいの」
カメは明るい声で「よし、がんばるぞ。美子、その前におまえが大学受からなけりゃ話しは始まらないけどな」と言って、わはははははと口を開けて笑った。カメの笑い声を聞くのは久しぶりだった。
それから小一時間、カメはリハビリを続けた。美子はそれをずっと眺めていた。

## リハビリに向けて

帰りのバスが大型スーパーを通りかかった。ここで降りる人も多かった。家族の人が買い物帰りに病院に行った老人たちを迎えに来ているからだ。大抵、ここで５分くらい停車する。
美子はスーパーの方を何気なく見ていた。丁度大売出しをしているようで、風船やらビニール袋に入ったお菓子を配っているようだ。そこに、髪の毛を金髪に染めた女子高校生らしい３人組が近寄り、風船やお菓子を独占しようとしていた。見るからに不良少女に見え

る。
大人を差し置いて風船やお菓子を取るものだから、お店の人も困った顔をしているように見えた。女子高生は一人で５～６個の風船とお菓子を抱えていた。
カメがそれを見ていて怒っていた。「しょうがない人だな、あいつらは・・・」と唸る。
美子も何をしているのかしら・・と危惧していた。

３人の女子高生は両手に風船やお菓子を抱えて駐車場の方へ歩いていく。するとそこには、乳母車に乗った子供や小さい子供たちがたくさんいた。
その子らに女子高生たちは笑顔で風船とお菓子を配りだした。小さい子は自分で取りにいけない。それを見ていた女子高生が気をきかせたのだった。
金髪、長いスカートなど見かけで不良少女と決め付けていたカメは言葉を失った。
そんなことを知ってか知らぬか、女子高生らは笑顔でお菓子を配っている。
「ちゃんと並べよ。お姉ちゃんがみんなの分をもらってきたから」
子供たちは「おねえちゃん、ありがとう」と小さな手で風船とお菓子を握って笑っている。
若い母親たちも目の前の出来事に困惑しながらも「ありがとうございます」と女子高生にお礼を言っていた。
配り終えると女子高生３人は屈託の無い笑顔で「バイバイ」と言いながら足早にその場を去って行った。
そんな女子高生の姿にカメは、「何ということだい、今時の女子高生はとんでもない子たちだと思ったけれど、何て優しい子たちなんだ。少しでもあの子らを疑った自分が恥ずかしいよ」と嬉しそうに涙ぐんでいた。
「今日は、いい事尽くしだ。ありがたや、ありがたや」と両手を合わせていた。

家に着くとカメは嫁の和美の姿を見つけると、急いで今孫の美子と話したことを伝えた。
「和美さんや、美子は大学に受かったらアパートに住んで一人暮らしをするっていうんだ。もし良かったらおばあちゃん、私の面倒をみてくれない、って言うんだよ。和美さん、そんな話し、聞いているんかい」
「はい、おばあちゃん聞いていますよ。まだ、一雄さんには話しはしていませんが、それでおばあちゃんの元気が出るのでしたら私は大賛成ですよ」
カメは少し涙声になって、うれしそうに言った。
「ありがとうよ、和美さん。オレはここのところ身体が動かんし気持ちも落ち込んで生きる気力をなくしていたんじゃ。もうオレはこの世で役立たずの人間になってしまったのかと情けなくてのう。そうしたら、美子が私しゃに一緒に住んでご飯を作ってくれというんじゃ。そのためにも、あと半年で元のように動けるようにしてくれないと一緒に東京に行けないよって、発破をかけてくれたんじゃ。オレはうれしくてうれしくて、まだオレにも役に立つことがあるんだって思ったら、どんどん生きる元気が沸いてきたんじゃ。ああ、

それからアパート代はオレに払わせてくれ。どうせ、年金が入ったって何も使い道が無いんだからよ。このように美子のために使えるんなら最高だっぺ」
「おばあちゃん、ありがとうございます。本当言うと、美子の学費でうちの家計は一杯だったから、美子には大学の寮に入ってもらわないと無理なのよ、と言い聞かせていたんです」
「そうかい、それじゃあオレは先生の言うことを聞いてリハビリを頑張らせてもらうよ。でも、美子が大学に受からなければこの話しはなくなってしまうがの。あははあ・・」
久しぶりに聞くカメの大きな笑いだった。

受験に向けて

美子はおばあちゃんが元気になってきたことを喜んだ。でもそれは、美子が受験に合格することが前提になる。プレッシャーもあったが、それ以上に何とか合格してカメに喜んでもらいたかった。
美子はまず毎日の習慣を変えることにした。
今までは学校から帰るとベッドに飛び込み大の字になってメールのチェックをしていた。それから、ネットで興味のある項目を検索して楽しんでいた。気が付くと１時間以上もそうしていることもざらだった。その後に勉強を始めるのには大そうなエネルギーがいる。何かと言い訳をつけて、勉強を後回しにしようとするからだ。
これからは帰宅したらまず机の前に座り、そしてすぐに勉強に取り組むことにした。人間は、最初に座ったところが肝心だということを何かの本で読んだことがあった。最初に座ったところで活動を始めるということだ。その論理で行くと、机に座れば勉強を始めることになる。
でも最初はすぐに机に座ることに抵抗があった。スマホをいじりたくなる衝動の方が強かった。
脳は現在の自分を守ろうとするらしい。いつもと違う行動を脳は嫌うということだ。だから、いつもと違う行動をしようとすると脳は必ず邪魔をしてくる。
「折角、学校から帰ってきたんだ。メール位チェックしてから勉強すればいいんじゃないかい・・・」などのように、脳裏に囁いてくる。でもスマホをいじりだしたら、しばらくは止まらないことは今までの経験で分かっている。
脳の特徴として、変わってしまった自分も守ろうとするらしい。ということは、少しずつ脳を騙しながら良い習慣を身につけていけば、悪い習慣と取って変えられるということだ。
それに何といっても美子は大学に合格して、カメと一緒に生活をしてカメに生きる意欲を持ってもらいたかった。人間は誰からからでもいいから自分の存在意義を認めてもらいたいのだ。カメが東京のアパートで美子の世話をするということは、カメが存在できる意味が生じることになる。それがカメの生きがいになることは痛いほど美子には分かっていた。

美子もカメが一緒にいてくれることが心強かったし、うれしかったのだ。

## 勇気

入川保雄は文京区の小さな「なんでも屋」というスーパーマーケットに副支店長という肩書きで働いている。現在４３歳になる。妻の笑子３７歳と１３歳になる娘の望と３人暮らしだ。
保雄の日課は朝の掃除から始まる。スーパーの始業時間は８時半からだが保雄はいつも７時に出社して店の前から隣近所まで掃き掃除をする。
スーパーの左隣は「日本興行」というバス会社の駐車場になっており駐車場の奥に事務所がある。駐車場は間口は３０メートル、奥行きは１００メートル以上はありそうだ。いつも２０台以上のバスが出番を待っている
事務所には運転手や事務の人も含めて数十人はいそうだ。

保雄はまず、自分の勤務場所であるスーパーの店先から掃除を始めて、ついでにバス会社の前も掃除をすることにしている。ついでということもあったが、バスの駐車場からは砂埃が舞い込むため、ここを掃除しておけばスーパーに埃がかぶらないという利点も考慮して掃き掃除をしていたのだった。
７時半になると道の前を小学生が集団登校していく。大体６～７人のグループのことが多い。
「おはよう、今日も元気でね」と大きい声で小学生に声をかける。子供たちも「おじさん、おはようございます」と返してくれる。
こんな時保雄は清清ｽｶﾞｽｶﾞしい気持ちになれる。この清清しさに魅せられて掃除を続けることができている。
掃除は勤務外だし与えられた仕事ではない。当然だが掃除をやっても給料が増えるわけではない。

「ああ、掃除も今日で終わりになるな」保雄は内心寂しく思った。
というのも、近くにエオンという大型のスーパーマーケットが開店することになり、なんでも屋は今日で店じまいを余儀なくされるからだ。
今日で仕事はなくなるが、今までお世話になったこの店を最後まで大事にしたかった。
なんでも屋の従業員は正社員７人で後の１０名はパートだった。店じまいは先月の会議で発表された。社員は３か月分の給料が退職金として支払われる。次の仕事は失業保険をもらいながら探すことになる。
保雄もこの仕事が一段落したら職業安定所に行こうと思っていた。おかげさまで失業保険

は８ヶ月間出るようなので生活は何とかなると思っていた。
店先には「本日で閉店します。今までのご愛護に感謝いたします。店主」と書かれた大きな張り紙が張ってある。
今日は大安売りで、商品すべてを売りつくすつもりだ。今までこのスーパーを支えてくださった顧客に感謝を込めて。
この日の売上げは非常によかった。すべて売りつくす為に原価割れの商品もたくさんあったからだ。閉店間近になると人ごみは最高潮に達した。保雄は少しでも他の従業員の手伝いができるよう店の中を巡回していた。
「ああ、こんにちは、入川さん。毎朝、掃除ありがとうございます」と声をかけられた。保雄にとって見ず知らずの人だった。
「今日で閉店ですか。私もこの店には随分お世話になりました。昼飯とか夕飯は大抵ここのお弁当で済ませましたから」という。
「ああ、失礼しました。私、となりのバス会社の者です」と言って名刺を出された。名刺には「日本興行株式会社　専務取締役　小早川　三夫」と書いてあった。保雄はやっと合点がいって
「ああ、そうだったのですか。今までご利用ありがとうございました」と笑顔でお礼を言った。
「でも、私が掃除をしていたのはご存知だったのですか？」
「はい、いつも事務所の窓から見ていました。大変ありがたかったのですが、残念ながら今日までお礼を言うチャンスを失っていました。というか、一緒にお手伝いをする勇気が私に無かったのです。お恥ずかしい次第です。会社の人間には朝礼などで、２階の窓から見える入川さんの掃除をしている姿を見ながら、あのように誰にも感謝されなくても掃除をされている人もいる、私たちも見習っていこう、などと偉そうに話しをしてはいたんですよ」
「そうだったんですか。そう言ってもらえただけで私は満足ですよ。ありがとうございます。でも申し訳ありませんが、今日で掃除もお仕舞いになってしまいますが・・」
「入川さん、そこでお願いなのですが、勿論今の仕事のかたがついてからで結構なんですが、うちでバスの運転手として働いてくれませんか。というのも、私は入川さんにぞっこんなんです。別に掃除はしていただかなくてもいいんですが、入川さんのような方が居れば社内の雰囲気も変わるでしょうし。うちの業界も人手不足でして・・。もちろん、今以上のお給料はお支払いさせていただきます」と言って小早川は頭を下げた。
突然の申出に保雄は戸惑ったが内心はうれしかった。仕事が見つかったといいうより、自分を信頼してくれる人がいたことを。

その晩保雄は残務整理をして１０時過ぎに帰宅した。
「おかえりなさい、最後の仕事大変だったでしょう」と、妻の笑子が出迎えた。中学３年

生の長女望も笑顔で立っていた。
「やあ、ただいま。何とか終わったよ」
「ご飯、温めますね。ところで、これからどうするつもりなの、お父さん」
「それがね笑子、奇遇なんだけど隣のバス会社の専務さんがお店に来て、うちでバスの運転手として働いてほしいっていうんだよ」
「えっ、何で専務さんがあなたのことを知ってるのかしら」
「俺が毎朝、お店の前とバス会社の前を掃除していたんだ。それを専務さんが見ていて、俺を気に入ってくださったんだよ。面白いよな、世の中って」
「それで、運転手をやるつもりなの」
「うん、帰り道を歩きながら考えていたんだけど、人に信頼されるってすごく嬉しかったし、どこで働いてもお客さんに奉仕することはできると思うんだ。今までは買い物のお客さん、今度はバスに乗ってくれるお客さんという違いだけだし。それに有りがたいことだけど、お給料も今より多めに出してくれるって言うし。望ももうすぐ高校生だろう。学費もかかるから助かると思ってね」
「ああ、よかった。私、内心ではお父さんが失業して高校に行けなくなるんじゃないかって心配していたんだ」と望ははしゃいで叫んだ。
「そうか、それは悪かったな、心配掛けて。でも望、お父さんたちは何があってもおまえの学費位は何とかするから安心して勉強しなさい」

## バスの運転手を目指して

入川は大型二種免許を取ることにした。この免許が無いと路線バスでお客さんを乗せて運転することはできないからだ。入川の持っている免許は普通免許で、取得して１５年以上経っている。大型二種免許を取る方法は、まず大型一種免許を取得してから次に二種免許へというのが一般的だ。でも、普通免許から大型二種免許を取得することも可能だが、そのハードルはかなり高い。
大型二種免許を取得する方法は、「指定学校」を卒業する方法と「届出教習所」で練習して、警察の運転免許試験場で実施試験を受験する方法の二通りだ。料金は「届出教習所」で練習をして運転免許試験場で直接試験を受ける方が安く上がる可能性は高い。しかし直接試験は、受かるまでに２０回近く落ちる覚悟がいるという。それほど、大型二種免許の取得は難儀なのだ。
入川は小早川専務の配慮もあって、「指定学校」で取得することになった。授業料は高いが、学校を卒業すれば実施試験は免除になる。
まず自動車学校で大型車を使って場内練習をする。大型仮免許を取得する。路上教習と二種学科教習を受ける。卒業検定を受け合格すれば卒業証明書を発行してもらえる。次に警察の学科試験に合格すればめでたく免許交付となる。

入川は合宿の指定学校に入学したおかげで、思ったより短期間で大型二種免許を取得できた。その間、生活に困らない程度のお給料も受給できた。小早川専務のおかげだ。
給料は路線バスより観光バスの乗車の方がいい。キロ手当て・洗車手当て・時間外手当などがつくからだ。昼食代もかからないし、泊まりの行程だと旅館に泊まって息抜きもできる。
入川は小早川専務から最初は路線バスで慣れてから観光バスの運転手を頼むと言われていた。観光バスのほうが直接お客さんとふれあう機会が多く、運転手であってもガイドさんと協力してお客さんにサービスをしていかなければいけない。スーパーで接客をしていた入川にはもってこいの仕事だからだ。入川の人柄について申し分ないことは小早川専務が一番熟知している。小早川は入川が観光バス運転手のカリスマ的存在になるような気がしていた。
入川は最初、接客マナーや実技について１週間程度事務所で講義を受けた。それが終わると、今度は実際にバスに乗って路線のコースを覚えていく。先輩のバスに乗り、運転席の隣に座ってコースやアナウンスの仕方、料金の受け渡し、お客さんとのやり取りについて学んでいくのだ。

１ヶ月もすると様々な訓練も終わり、一人で路線バスを運転する日がついに来た。入川は緊張していた。朝はいつもより早めに出勤して営業所の入口近辺を掃除した。もうじき春を迎えようとしている。桜の蕾もふくらんできている。空を見上げ青空の合間に浮かんでいる白い雲を見つめる。白い雲は、猫が笑っているように見えた。ふぅーと、大きく息を吐いて「どうか、一日事故もなくお客さんを目的地まで安全に送れますように」と祈った。

入川の乗車する路線は「上６０」といって、池袋駅東口から大塚駅、東大農学部、根津駅を経由して上野公園までのコースだ。都会の込み合った国道を進むコースである。
入川は池袋駅東口を７時３０分に出発するバスを運転することになった。営業所から池袋駅に着くと、もうすでに１０人くらいの列ができていた。
バスターミナルに着くと入川は入口のオートドアを開けてお客さんが無事に乗車を終えるのを確認すると口元にセットされたマイクを通して語りかけた。
「みなさん、おはようございます。運転手の入川と申します。実は今日初めてこの路線バスを運転します。でも、ご安心ください。安全運転に心がけ、みなさまを無事に到着ターミナルまでお送りいたします。よろしくお願いいたします」と言うとバスをスタートさせた。あまり自己紹介する運転手はいないので、乗客は唖然としていた。
最初のバス停である豊島区役所前に着くと、８０歳くらいの老女が杖をつきながらバスの段差を上がってきた。そして入川に「シルバーパス」を見せながら席を探し始めた。入川は後ろを振返り、１つだけ空いていた席を見つけ

「申し訳ありません。今、お客さんが空いている席に着くまで今しばらくお待ち下さい」とアナウンスした。二人掛けの席で、窓側に女子学生が座っていた。女子学生はおばあちゃんの手を取って、窓側に席を譲っていたのが見えた。入川はその仕草を微笑ましく思い「女子学生さん、心遣いありがとうございます。それでは出発します。みなさま、お待ちいただきまして誠にありがとうございました」とアナウンスをしていた。

ハプニング

バスは進んで行き、大塚駅前を通り根津駅に向かっていた。入川はバックミラーでおばあちゃんの様子を伺っていると、女子学生がそわそわしているのに気がついた。
「女子学生さん、何か困ったことでもありますか？」とマイクで聞いてみた。新人ゆえの行動だった。これがベテランならば、様子が変だなと分かっていてもバスの運行上無視せざるを得なかったかもしれない。
「すみません、このバスは東洋アジア大学には行かないのですか？」女子学生は心配そうに聞いてきた。
「ああ、そこへ行こうと思ったのですか。生憎このバスは東洋アジア大学は通らないんですよ」
「ここからだと、どう行ったらいいんでしょう。９時から入学試験が始まってしまうので‥」
「ええっ、そうなんですか！・・」入川は、バス路線は覚えたが、このあたりの地理に詳しくはなかった。時計を見ると８時を回っている。９時からの試験といっても少し早めに着いて、試験を行う教室を探したりする時間も必要だろうと考えた。
おもむろに自分の財布の中身を想像した。自分の小遣いは２万円だ。スーパーを辞めてバス会社に移ったばかりで、一人前の給料をもらっていなかったので、少ない小遣いは仕方なかった。
これで昼食代その他をやりくりしなくてはいけない。１日６００円に抑えようと心がけていた。３，０００円の出費は正直痛い。でも、そんなことは言っていられないと思った。
「お嬢さん、ちょっと」と入川は女子学生さんを運転席に呼んだ。女子学生はそれに呼応するように入川に近づいてきた。次のバス停の弥生町でバスを止めてからこう言った。
「お嬢さん、これでタクシーを捕まえて東洋アジア大学に行ってください」と言いながら３，０００円を渡した。
「これは、おじさんからのプレゼントだから気にしないでね。合格することを祈っているから頑張りなさい」
女子学生はどうしたものか迷っている風だったが、時間も切羽詰っているので
「運転手さん、ありがとうございます。必ずこのお金はお返しにあがります。お名前だけ聞かせてください」と言ったが、入川は
「大丈夫ですよ、気にしないで、さあ早く行きなさい」と言って、笑顔で見送るとバスを

走らせた。

偶然

美子はバスのナンバーをメモした。後で、親切にしてくれた運転手さんに後でお礼を言うためだ。ただ、今は東洋アジア大学に早く着くことだけを考えた。カメおばあちゃんとの約束を果たすため、東洋アジア大学に合格しなければいけないからだ。
そこに個人タクシーが来た。美子は手を挙げてタクシーを止めた。自動ドアが開いて美子はタクシーに飛び乗った。
「すみません、東洋アジア大学までお願いします。ここからまだかなりありますか？」
タクシーの運転手は「いえ、割と近いですよ。空いていれば１５分くらいですよ」と教えてくれた。
「そうですか、良かった。これから受験なんですが、乗るバスを間違えてしまって途方にくれていたんです。そうしたら、バスの運転手さんが３，０００円を私にくれてタクシーを捕まえて大学に行きなさいって・・」
「そうだったのですか、今時そんな親切な人がいるなんてね、うれしいな。ところでお嬢さん、そのバスの運転手さんの名前とどこのバス会社だったか覚えています？」タクシーの運転手は走りながらバックミラーで女子学生を見ながら話しかけてきた。
「バスのナンバーはメモしました。バス会社は日本興行だったと思います」
タクシーの運転手はメモ用紙を女子学生に渡し、「この用紙にナンバーを書いてください。あなたを東洋アジア大学で降ろしたら、私がバスの運転手さんの所に行って無事あなたを試験場に送り届けたことを伝えに行ってきましょう。ああ、そうそう、あなたの連絡先も書いておいてください。そうしたら、バスの運転手さんの名前や連絡先を聞いて報告してあげるから」
「すいません、よろしくお願いいたします」と美子はそれだけ言うと心からホッとした。バスのナンバーから、運転していた方をどうやって探そうか、気になっていたからだ。これで胸のつかえは取れた。試験に集中できそうな気がしてきた。

善夫は体調が良かったので、今日はタクシーを走らせていた。身体が続く限り、仕事は続けるつもりだ。お客さんとの触れ合いが楽しかったからだ。
そんな時、ひょんな事からバスに間違えて乗ってしまった女子学生をお客としてタクシーに乗せ、お願い事を託された。女子学生から渡されたメモには「３０９８」という数字が書かれていた。バスのナンバーだ。スマホで「日本興行」を検索すると、文京区大日向に営業所があるという。東洋アジア大学から大日向までそう遠くはない。善夫は日本興行に向けて車を走らせた。
日本興行の営業所は、丸の内線茗荷山駅の並びにあった。車を止めて善夫は営業所の事務

所に入っていった。
大きな駐車場が左手にあって、右手奥に２階建ての事務所があった。１階の扉は左右同時に手前に引いて開ける種類のドアだ。善夫は取っ手を引いて中に入った。目の前に受付があって、３０代くらいの男性職員が座っていた。
「あのう、つかぬ事をお聞きしますが今日８時ごろに３０９８のバスを運転していた方を探しているのですが・・」
「何かありましたか？」と男性職員が聞いてきた。
「いや実は私個人タクシーをやっている田所と申しますが、先ほど東洋アジア大学を受験する女学生を乗せたのです。彼女が言うには乗るバスを間違えて途方にくれていたら、そのバスの運転手さんが女学生に３，０００円を渡してタクシーで急いで試験場に行きなさい、と言ってくれたそうなんです。私は彼女から頼まれて、その親切にしてくれた運転手さんの名前と連絡先をお尋ねしたいと思ってここに来たんです」
「ああ、そうでしたか。ちょっとお待ちください」と言って男性職員は奥に入っていった。
しばらくすると、中年の男性が善夫のところにやってきた。
「私、ここの専務をしております小早川と申します。どうぞ中へお入りください」と言って、善夫を応接間に通した。
善夫は名刺を小早川に手渡しながら、事の詳細を説明した。小早川は頷きながら話を聞いていたが、善夫の話しが終わるとこう言った。
「そうでしたか。実はこの運転手は入川という者でして、今日始めて一人で路線バスに乗車しているんです。入川はこの営業所の隣にあったスーパーの副支店長をやっていたのですが、スーパーが店を閉めることになってここに勤めることになったんです」
「そうだったんですか。でも、今時なかなかこういった親切はできるもんじゃないです。この人はどういう方なんですか」
小早川は少し考えた挙句、言葉を続けた。
「入川は、何年も前から朝７時くらいからスーパーの前を掃き掃除をしていたんです。通行する人たちに『おはようございます』って声をかけながらです。私も何度か挨拶をされたことがありまして、この人は大したものだと感心していたんです。そのうちに、うちの営業所の前も掃除をしてくれるようになりましてね。ここの２階からその様子をみていまして、私も一緒にやりたいけどと思ってはいたのですが、なかなか勇気が出なくて一緒にできなかったんです。そして先日、スーパーが店仕舞いされることが決まったんです。入川はこれからどうするつもりだろう、と気になり意を決して閉店の日に入川を尋ねたんです。すると、入川は今後のことはまだ決めていないと言うものですから、是非うちに来てくださいと、強引にスカウトした次第なのです」
「なるほど、そういう経緯ｲｷｻﾂがあったのですね。やはり、この人は普通じゃないですね」
「本人はいたって普通と思っているでしょうね。でも、入川の行動には人を引き付けるオーラのようなものがあるんです。彼を見ていると、自分のことが恥ずかしく感じられるこ

とがよくあるんです。彼は無意識だと思うのですが、廊下のゴミを拾ったり自動販売機が汚れていれば雑巾できれいにしたり。みんなは誰かがやるだろう位しか思っていないことを入川は当たり前のことのように自然体でやってしまうので、今では職員全員から一目置かれています」
「そうですね、入川さんは器が大きい気がします。私も勉強になりました。ところで、入川さんの連絡先を教えていただけませんか。女子学生がどうしてもお礼とお借りした３，０００円をお返ししたいというものですから」
「話しは良く分かりました。入川の連絡先はこの営業所宛にしてください。彼の名前は『入川保雄』といいます。でも、田所さん、あなたも変わった人ですね。一人の女学生のために貴重な時間を割いて、ここにいらっしゃるなんて」と言いながら小早川はうれしそうだった。

手紙

そんなことがあってから１週間が過ぎた。日本興行文京営業所に１通の手紙が届いた。宛先は「入川保雄」である。裏を返すと桐谷一雄と書いてあった。

拝啓　入川保雄様
私は先日あなた様から親切にされた桐谷美子の父でございます。バスの行先を間違えて乗車し困惑していた娘、美子にご親切にもお金をお貸しいただいたおかげさまを持ちまして娘は無事に受験を終えることができました。何とお礼を申し上げてよいものやら、言葉が見つかりません。
試験を終えて帰宅した娘から今日起きた出来事を聞き、家族全員があなた様のご厚意に頭が下がる思いでした。
本来ならお伺いして直接お礼を申し上げるところですが、今、年度末で私の仕事が立て込んでいることもあり、書面にて失礼させていただきたく思います。
しかし、あなた様のご厚意は一生忘れることはありません。
誠にありがとうございました。
桐谷　一雄

入川保雄様
先日はお世話になり、本当にありがとうございました。
大学受験のために乗ったバスの路線を間違えてパニックになっていた私を、入川さんのご親切により救われました。
実は私、東洋アジア大学にはどうしても合格したかったんです。私にはカメというおばあちゃんがいます。おばあちゃんは７５歳ですが、先日骨折をして入院して思うように体が

動かなくなってしまいました。すると、体ばかりではなく生きる意欲さえも失ってきて、「早く死にたい」というのが口癖になっていました。
今までは人一倍元気で、家族だけでなく近所の方々の面倒を見てあげるのが大好きな人だったので、自分がもうこの世の中で役に立てなくなってしまったことが本当に辛かったんだろうと思います。
そこで私が思い立ったことは、大学に合格したら大学の近くにアパートを借りておばあちゃんと一緒に暮らすことでした。
私はおばあちゃんに言いました。「東京で私と一緒に暮らして私のご飯を作ってね」、と。
おばあちゃんは頼られるのが大好きな人です。私からそう言われてから、生きる意欲が出てきたみたいで、リハビリも今までの何倍も頑張ってくれるようになったんです。
そうすると私は絶対に大学に合格しなくてはいけなくなりました。受験勉強も生まれてから一番頑張りました。受験当日、私は試験のことで頭がいっぱいで乗るバスを間違えてしまいました。あの時の３，０００円は私にとってどんな大きなお金よりも貴重なものでした。その時私は正直このお金をお借りしていいものか躊躇しました。でも入川様はこう言ってくださいました。
「これは私からのプレゼントだよ。試験頑張ってね」と。
その時、私の脳裏におばあちゃんの顔が浮かんだんです。そうだ、今私はおばあちゃんのために絶対東洋アジア大学に受からなくてはいけないんだ。今はこのご厚意に甘えようと。
私は入川様のご厚意に甘える決意をしました。そのおかげで、私は試験に集中することができました。まだ合否の結果は分かりませんが、私には合否という結果以上のことを入川様から学ぶことができました。
また入川様を探し当ててくださいましたタクシーの田所善夫様にも恵まれました。後日、田所様から連絡をいただき、無事に入川様のことが分かったこと、私が無事受験をできたことをバス会社の方に伝えていただいたことを教えていただきました。田所様はお忙しい所、時間を割いて入川様を探してくれました。
多くの親切な方々に助けられて今の私がいます。今度は私が誰かを助けなくてはいけないことが起きたら、絶対に勇気を出して手を差し伸べたいと思います。これを私は入川様や田所様から教えていただきました。
私、大学に合格したら絶対に直接入川様にお礼にお伺いします。
お借りしたお金を同封させていただきました。本当はお礼のお品も一緒にお送りしようと思ったのですが、それは入川様の善意を汚すことになるかもしれないと思い直しました。
また入川様もきっとそれを受け取ってくれないような気がしました。
私たちの心からの感謝の気持ちを、手紙を通して正直にお伝えすることが一番いいのではないかと思いました。
私、これを書きながら涙が止まりません。
入川様、このたびは本当にありがとうございました。

桐谷美子

敬具

投書　1

手紙を受け取った入川はうれしかった。あの時、後先考えずにお小遣いを有意義に使えたことに自己満足していた。
その日、入川は自宅に帰ると手紙を妻の笑子に渡した。
「なーに、この手紙」と言いながら笑子は「これ読んでいいの」と聞いた。保雄は黙って笑顔で頷いた。笑子はそれを見ると封を開けて手紙を読みだした。

静かな時間がゆっくりと流れていった。保雄は椅子に腰かけ笑子が読み終わるのまで目を閉じて待っていた。
「あなた、あなたのお小遣いからこのお嬢さんにタクシー代を出してあげたのね」
「ああ、迷ったけど良かったと思っている。もう少しで僕は人でなしになるところだった」
「あなた素敵よ。今までも大好きだったけど私、あなたのことをもっと好きになってしまったわ。なかなかできることじゃないわよ」
そこへ中学生の望が来て「ねえ、何があったの」と聞いてきた。笑子は「お父さんが素敵なことをしたのよ」と言って、ことの詳細を話して聞かせた。すると望は「お母さん、今のお母さんの気持ちを新聞に投書してみたらという。笑子は心の中で「そうね。私の大好きな旦那様を全国に人に紹介しようかしら」と思った。

投書　2

全国紙の投書欄に次のような文面が掲載された。

路線バスの運転手をしている夫から聞いた話だ。
朝の７時半過ぎにバスに乗ってきた女子学生が慌てた様子だった。午前９時から入学試験が始まるのに、行先の違うバスに乗ってしまったという。
違うバスに乗り換えていたのでは間に合わないと判断した夫は、財布から３，０００円を女子学生に渡し、タクシーを使うように勧めた。
「返さなくてもいいから」と。
その後、その女子学生を乗せたというタクシーの運転手さんが夫の勤めるバス会社を探し出して立ち寄ってくれた。無事、受験に間に合ったと報告しに来てくれたのだ。
さらに後日、本人からバス会社にお礼の手紙が届いた。無事に受験できたことが記されて

いた。
３，０００円も丁寧に戻してくれた。
その話をする夫はとてもうれしそうだった。信念をもって仕事に打ち込んでいる。改めて尊敬する出来事だった。
彼女が幸せな学生生活を送れるように二人で願った。

（〇〇市　　入川　笑子）

## 生前葬

春から夏へと季節は移り始めている。善夫は、だんだん弱ってきている自分を感じていた。体重も徐々に減ってきていた。体調は悪くないのだが、そろそろ「生前葬」というお別れの儀式を行うべき時が来たと感じていた。
息子の正雄にも協力してもらい、数十人が入れる場所を探してもらった。文京区のアカデミア千谷である。料金も安く広さも丁度良かった。
来賓の選定は善夫の仕事だ。善夫がお世話になった人、会いたいと思っている人をピックアップしていった。
親戚、友人、そして最近友達になった和樹、大吾君にも来てもらいたかった。また、
ひょんなことから知り合いになった女子学生、桐谷美子とおばあちゃんのカメさん、路線バスの運転手の入川保雄と奥さんの笑子さん、バス会社の専務である小早川さんなどの人たちには是非参加してほしかった。
善夫の希望で紅白の垂れ幕が張られた。生前葬には相応しくなさそうだが、明るい雰囲気を醸し出したかった。
結果は上々だった。昼の１時にスタートした生前葬は盛り上がった。カラオケあり、バカ話あり、みんなで善夫の今までを振返り噂話に花が咲いた。

徐々に時間は過ぎていき、生前葬も終わりに近づいてきた。善夫は予ｶﾈてから吹き込んでおいた「お礼と感謝、そして私の人生」というテープを流し始めた。

## 善夫の生前葬の席での独り言

みなさん、今日はお忙しい中私の生前葬にお集まりいただき誠にありがとうございます。
末期ガンに侵されてから残りの時間を大切にするために私は一切の治療をすることをやめました。そのことが良かったかどうかは分かりませんが、自分のやりたいことをやりながらここまで無事過ごさせていただきました。

これまでに皆様からいただいたご厚意に対し、私が生存する間に直接お礼を述べることができました。これで私も心置きなく旅立つことができます。
その前に僭越ながら私は皆様にお話ししたいことがございます。これから申し上げることはあくまで私の主観的なものであり、戯言ﾀﾜｺﾞﾄと思っていただいて構いません。私の人生を通してこれだけは申し上げておきたいという私の我がままをお聞きくだされば、こんなにありがたいことはございません。

私は５年前に生涯現役で働くことを決意しました。自分は働いていないと心を平穏に保てない性格だからです。楽しく働けること、お客さんから求められているうちは働こうと決めました。
そして働きながら勉強をしようと思いました。勉強とは先代が経験し発見した知識や智恵を自分のものとするものです。自分で考えていたら一生掛かっても分からないことも、先代の著書を読むことにより５分で理解できることもあります。勉強をして自分を磨いて人の役に立てた時、私の人生に意味が生じると思ったのです。

つい最近まではこのように熱い情熱に燃えていました。でも、私を蝕むガンが私の時間を奪っていきました。それで今、私の人生を振返ってみることにしたのです。これからお話しすることがどなた様かの生きる指針に少しでもお役に立てれば幸いだと思うからです。

仕事は自分が楽しく感じられるものを選んでください。そして働く目的はお客様に喜んでいただくためです。そしてそのお返しに円という名の「ありがとう」をお客様からいただきます。
人を騙しても円の代わりに「怨ｴﾝ」を集めることもできます。「怨ｴﾝ」を集めるとその時はよかったと思っても、必ず後で何倍もの悪いことが起きます。お金はエネルギーだからです。「怨ｴﾝ」には人の怨念が憑依しています。
人様に喜んでいただいた結果としてお受けした円という名の「ありがとう」には、お客様の感謝のエネルギーが込められていますから良いことがどんどん起こるでしょう。

普通という言葉にはみんなと同じが良い、みんなと同じような生き方をするのが幸せに違いないという感覚があります。しかし、普通でないのが幸せの本質でもあります。
これらを整理し思うことは「平穏無事に今日も一日が終わった。これが私にとって最高の幸せだ」と感じられるようになりました。みんなと違っても自分にとっての**ふつう**の一日、これが最高です。

私は心配性でした。でも心配を心配りｺｺﾛｸﾊﾞﾘという言葉に変えてみることにしました。
その結果、私は相手の気持ちが分かるようになってきました。自分の内面を見つめるため

に体の中に心の灯火を燃やしてみます。すると欠点だと思っていたものが体の隙間から木漏れ陽のように灯ﾄﾓり、欠点が仄々とした利点に変わるような気がしたのです。
そうだ、自分の欠点を美しく引き立つ個性に変えていけばいいのだと気がつきました。故に心配性も悪くはないと思えるようになりました。

私はたまに時間を無駄にしているような自責にかられる時がありました。いくら「もういいんだよ・・、あわてなくても」言い聞かせても、「成果」に拘る自分がいたことは事実です。もしあなたが「時間を無駄にしている」と感じたら、自分にこう言ってあげてください。「今、健康かい？」って。心身ともに健康なときこそ、無限の時間を与えてもらっているときはありません。
もし今あなたがケガや病気で病院に入院しているとしたら、治療に何日も、いや何ヶ月も自由を奪われているかもしれません。退院しても自宅でしばらく臥せていなければなりません。その奪われた時間はどれ位大きいものか想像してみてください。
あなたの脳裏を埋め尽くすのは「早く治って**ふつうの**生活に戻りたい」という感情だけだと思います。
つまり時間を無駄にしていると感じている**ふつう**の生活が、実は何よりも一番時間を与えられているのだと知ってください。
「今日は最高でしょう。時間を無駄にできて・・・」

人間である以上、人生を歩んできた決断がいかに正しかったとしても、いつしか「死」は眼前にやってきます。
そのとき、慌てることがないように「死」を日常的に感じ続けていてほしいと思います。
その結果、どうでもいいような些細なことで頭を悩ますことは減ってくると思いますし、穏やかな気持ちで過ごせる日々が増えていくことでしょう。
下りの人生に意味があるのです。「終わりよければすべて良し」です。死ぬ間際の「満足感・幸福感」は、これからの生き方しだいで決まります。
このように考えてきますと、人生とは物質的な豊かさを求める道ではなく、心の安らぎを求める道であるべきだということが分かります。

＜会場はシーンとしていた。誰の表情にも善夫の言葉を聞き逃さないという真剣さがあった。その静寂の中を善夫の声だけが厳ｵｺﾞｿかに流れていく＞

幸せの頂点を極めれば、次に来るのは不幸せと決まっています。反対に今がどん底の極みだとしたら、今度は来るのは幸せに決まっています。人生は振り子のようです。
幸せのときは「こんなに幸せでいいのかな」と思ってわざと悪いことを探してしまいます。
不幸せのときは「もうこれ以上悪いことは起こらないだろう」と考え明るい感情が芽生え

てきます。人生は、これらの繰り返しなのでしょう。

生きることは容易いことではありません。毎日必死に生きていくことはつらいものです。
だから、誰でも現実から逃避したくなります。
もし１０年前の自分が目の前にいたら、あなたはどんなアドバイスしてあげますか。
「あなた、そのままがんばりなさい。きっとあなたの人生はうまくいきますよ。でも、もう少し気楽に生きてみたらいかがですか。あなたが思っているほど世の中捨てたもんじゃありませんから」と笑ってアドバイスをしてあげるのではないでしょうか。

「財産・名誉・権力」は決して幸福を運んでは来ません。これらは、求めれば求めるほど「まだまだ足りない・・」と迫ってくる代物だからです。
幸福になりたいと頑張れば頑張るほど苦しみが増してくるのは、もっともっとと、求めてやまない人間の性があるからです。
幸福は外からはやってきません。幸福とは自分を認め自分に満足できたときに自分の内面から自然と沸き起こってくる感情だからです。
幸福になりたければ幸福を感じることができるハードル、つまり自分が満足できると思われる価値観を低く下げていってください。これが、幸福で生きていくための唯一の秘訣です。
例えば何を着ていても、何を食べても、どこに住んでいても、心から満足し感謝できるようにしてください。生きていくのに必要なものがあればいいという感覚を持つことです。
自分から離れていくもの、例えば健康・財産・名誉・権力・悪い人間関係などを追い求めないでください。反対に人から感謝されて良かったなという感覚は忘れないでください。
でも安心してください、感謝されたことは忘れようと思っても忘れられませんから。
意味があってもなくても、どんなに苦しくても「ああ、よくやったなあ」とつぶやいてみてください。あなたの脳はとても喜ぶでしょう。思考は言葉を通してしか成り立たないからです。脳は発声した言葉しか信じません。

自分は誰かの思い通りになる人間ではありません。だとしたら相手の人はどうでしょう？
もちろん、自分の思い通りに変わってはくれないと思います。何かを変えたかったら、
まず自分が変わってしまうことです。
病気になり、余命を知って「どうせいつかは死んでいくのだと悟ったとき」気持ちが楽になりました。「ああ、もう無理はしなくていいのだ。自分の好きなように生きていけばいいのだ」と思えました。もう少し早く悟りが開けていれば良かったと思います。これが凡人の所以でしょうか。
過去を振返り自分なりに良くがんばってきたと、初めて自分を褒めてあげることができました。それも自分に携わっていただいた皆さま方のおかげです。皆さまに心から感謝申し

上げます。
「自分だけは良くなりたい・・・」と思い続けてきた私のエゴの土台を壊し、次の世代にバトンタッチしていく覚悟もできました。
後はお迎えがくるまで笑顔を忘れないでいようと思います。

＜会場からすすり泣きが聞こえている。その声もスピカーの中へと吸い込まれていくようだった＞

最近ガンになってつくづく良かったと思っています。余命が分かったので、この半年間好きなことができました。お世話になった人にお礼の挨拶に行けました。生前葬もこのように楽しく行うことができました。紅白の垂れ幕で行った生前葬は前代未聞だっただろうと思います。
皆様の明るい笑顔は私にとっても最高のご褒美でした。
何と言っても私の人生に花を添えてくれたのは和輝君と大吾君に出会ったことでした。
本当に短い時間だったけど、彼らに係わらせていただいた時間は私にとって宝物でした。
和輝君と大吾君には夢を持とうと言いました。夢を持つということは目の前の壁を越えていくことに他なりません。夢が無ければ壁は出現しません。二人にはより多くの壁を乗り越えていってほしいと願っています。

毎日明るい心で自分のやるべきことをして生きている時が幸せなのです。
退屈で誰からも必要とされていないと感じている時は辛いものです。もし不幸だなと感じた時には、「愚痴や文句を言いたいことがあるかなあ」と自問してみてください。大した愚痴や文句が無ければ幸せだと思ってください。

「そう、幸せとは後で気がつき懐かしむものです」

私に出会ってくれたすべての皆さん。ありがとうございました。私の人生は皆さんのお陰で最高でした。
またいつか、お会いできる日を楽しみにしています。　　田所善夫

善夫のノベル

生前葬から１ヶ月が経った。今日は７月１日だ。前より胃が少し変に感じる。最近妻の朋子が私に寄り添うことが多くなった。私はその妻を抱きしめる。でも心が少し寒い。

７月１５日。食欲が落ちてきた。お腹の違和感が増している。

７月３０日。前は太らないように体重を維持するのに苦労していた。食事、運動、お酒などに気をつけていた。ところが今は自然と体重が３キロ減少した。ベスト体重５４キロなのに今日５０キロを切ってしまった。

８月３日。兼ねてから相談をしてあった葬儀社に連絡を取った。打合せどおり内輪だけで質素にやってほしいと伝えた。生前葬をしておいたので、皆さんには私が亡くなったら手紙を出すようにお願いをした。

８月５日。胃の違和感がひどいのでモルヒネの量を増やした。今まで半錠だったものを１錠飲むことにした。すると想像以上に違和感が取れ爽快になった。副作用もない。もっと早くからモルヒネのお世話になれば良かったと思う。

８月２０日。日課の散歩がきつくなってきた。体重も４５キロになってしまった。いよいよお別れが近づいてきたのか。やりたい事をやってきたので悔いは少ないが、少し寂しい。なんでもできる時間とお金があるのに新たなことはもうできないだろう。

９月１日。ついに体重は４２キロになってしまった。あの筋肉質の身体はどこにいってしまったのか。今はがりがりだ。モルヒネを増量した。苦労は便秘だ。便秘薬を用い便が硬くならないように気を使う。心肺機能の低下を感じる。トイレに行くのがこんなに大変だとは思わなかった。周りから「大丈夫？」「無理しないでね」と気遣われるが鬱陶しく感じる。気を使われるのがこんなに鬱陶しいとは思わなかった。

９月８日。ここ１週間水だけで何も食べていない。さすがにふらつく。ここの所、眠くて仕方がない。ほとんど眠っていることが多くなってきた。夢も良く見る。夢でたくさんの人に会った。そろそろ目が覚めなくなるかもしれない。でも、気持ちがいい。死ぬ間際に脳内ホルモンが出て何ともいえない快感を味わえると聞いていたが本当だった。今まで経験したことのない素晴らしい感覚だ。

９月９日。ずっと眠っていて少し目が覚めた。私の顔の前に朋子の目があった。
「あなた、ありがとうございました。あなたと一緒に生きてこられて幸せでした」と言われた。
私は返事をしたかったけど、ただ頷くのが精一杯だった。この一言を聞くために私は生まれてきたのだろうか。
隣で正雄が「おとうさん、ありがとうございました。また今度生まれてもお父さんの子どもでいたいよ」と言ってくれた。最高の褒め言葉だった。嬉しくて涙が止まらない。もう

脱水していて身体に水分が無いと思うのだが不思議と涙が頬を伝っていく。私は幸せだ、もう何も思い残すことはない。神に感謝した。

私は天に向かって昇り始めた。とてもきれいな花畑が見えてきた。この世のものとは思えない美しさだ。近づくと花のトンネルになっている。その中を私は吸い込まれるようにゆっくりと進んでいく。トンネルを越えるとそこには私の大好きな川が流れている。なんて美しい水の色だろう。スカイブルーだ。ああ、気持ちがいい。なんて爽快なのだろう。さようなら、みんな。また会う日迄グッドバイ。

「呼吸が止まりました」医師の低い声がした。